



ふおーらむ

第5号

10周年記念特集号



図書館サポートフォーラム

目 次

序言

「10周年記念特集号発行にあたって」 代表幹事 山崎 久道 p.2

「図書館サポートフォーラムの今までとこれから」 特別顧問 末吉 哲朗 p.3

「図書館サポートフォーラム—図書館飛翔の夢を追い続けて」 末吉哲朗・大橋絃子 .. p.4

図書館サポートフォーラム賞表彰者一覧 p.6

第10回図書館サポートフォーラム賞 表彰式 p.8

図書館サポートフォーラム規約 p.12

文集 —10年を振り返って—

井上 如 「ケセラセラ」 p.14

植村 達男 「田山花袋『蒲団』のモデル岡田美知代と兄岡田実磨」 p.16

恵光院 白 「図書館への我が思い出、図書館巡礼、など—友人への手紙から—」 p.18

近江 哲史 「図書館のある風景（その二）」 p.20

門倉百合子 「ベトナムとの出会いと図書館」 p.22

京藤 松子 「激動の10年間とLSFへの提案」 p.24

古賀 節子 「21世紀の学びと学校図書館」 p.26

坂本 義実 「仕事場としての図書館」 p.28

末吉 哲朗 「図書館ネットワークの今昔」 p.30

平井 紀子 「ト・テ・シャン談話—もう一つの私の十年史—」 p.32

水谷 長志 「図書館の風景と図書館の写真のこと—10年前のアムステルダムの朝から」 p.34

三浦 邦雄 「にわとりと卵」 p.36

山内 明子 「俳句八吟」 p.37

山崎 久道 「この10年をふりかえって思う

—社会的共通資本としての図書館、データベースの整備を—」 p.38

長倉美恵子 「図書館サポートフォーラムとは？」 p.40

年表 —10年の活動のあゆみ—

10周年記念特集号発行にあたって

代表幹事 山崎 久道

図書館サポートフォーラムも、皆様方のご支援とご努力のおかげではや10年の歴史を刻むことができました。会員・幹事・事務局スタッフの皆様の、これまでのご協力に対して、厚くお礼申し上げます。

このフォーラムを支える精神は、10回を数えた「図書館サポートフォーラム賞」のコンセプトによく現れていると思います。それは、「社会に積極的に働きかける」「国際的視野に立つ」「ユニークさを持つ」の三点です。これらについては、初代の代表幹事であり、このフォーラムの生みの親であった末吉哲郎さんが、いつも口にしておられたことでもあります。私も及ばずながら、末吉さんが掲げられた炬火を受け継いで、次の走者に繋ぐまで、何とかがんばってゆきたいと思っています。

この特集号は、前半は、このフォーラムの紹介と活動実績からなり、後半は、会員から寄せられた文章・作品を収録して

います。図書館を軸に素晴らしい広がりを感じていただければ幸いです。また、この特集号の企画は平井紀子さんの肝煎りで実現の運びになりました。このように立派なものを作っていた、感謝いたします。

この特集に寄せられた皆様の思いを胸に刻んで、今後の図書館サポートフォーラムのさらなる発展を目指したいと思えます。ありがとうございました。

図書館サポートフォーラムの今までとこれから

特別顧問 末吉 哲郎

図書館サポートフォーラムは1996年に発足している。

別頁に書いたように小生が創設を呼びかけたことになっており、最近まで代表幹事をつとめさせていただいた。この間会員の皆様はじめ幹事各位、そして何より事務局として当会を支えていただいている日外アソシエーツ大高社長、スタッフの方々にお礼を申し上げる。

本会は公共、大学、専門等の図書館に籍をおいて活躍した人のOBの会であるが、発足以来各種図書館の現場見学を行なったり、表彰事業を通じて図書館の多彩な活動を推進した人々を世間にアピールすることにより図書館の広報に寄与しようとしている。

もちろんOB会であるから現職中の思い出を語り合ったり親睦を深めることも大きな目的であって、この会が唯一の拠り所と頼りにしているOBの方もおられる。

また図書館経験を通じて得た知見を蓄えた方が多く、それ

を基に新しい図書館活動分野を摸索したり、出版や活字文化の発展、データベースの構築などについて発言している人も多く、これらを結集すれば会として各方面に提言できるかもしれない。

最近の新聞報道によれば霞が関官庁のOB組織「脱藩官僚の会」が設立され、天下り禁止や税金の無駄遣い一掃などをテーマに現役時代の各省の経験交流を活かして提言活動を行なっていく予定とか。

目を海外に転じて、アメリカでは現役を退いた老練者はベテランの称号で呼ばれており、在郷軍人のベテランズ・ソサエティは大統領選挙にも大きな影響を与えているようである。

10周年を迎えた本会がわが国唯一の各種図書館経験者のベテランズ・フォーラムであるとすれば、それなりの活動分野が待っているのかもしれない。おのおの方ががんばろうではありませんか。

図書館サポーターフォーラム

—図書館飛翔の夢を追い続けて—

末吉哲郎・大橋紘子

1. 図書館サポーターフォーラムとは

図書館サポーターフォーラムは1996年に発足した。主に図書館を卒業した方や図書館から他の職種に転出された有志の集まりである。例えば、大学図書館出身で文献目録・解題を手がけている方。あるいは大手保険会社情報センタ―長を務めあげ、今は大学と企業の連携事業の展開・支援に従事している方、公共図書館出身で出版社の編集に手腕をふるっている方など、実に様々な経歴の持主が揃っている。変化に富む顔ぶれに共通することは、年を経ても衰えない情熱と経験に裏打ちされた知識、そして境界を結ぶ「図書館」という場に対する深い愛着である。

時代とともに図書館も変わり始めている。革新に向けて動き出す人たちがいる。何か手を貸せることはないだろうか——、そうした思いを抱いた人々が結束し、この図書館サポーターフォーラム発足に至った。図書館の経験を踏まえながら、図書館で頑張っている方々をサポートしていく、というのが会の主旨である。

2. 活動の概要

年に一度の総会、表彰事業（後述）、文集「ふぉーらむ」の発行や、不定期に開催する見学会などでメンバーの交流が行われている。見学会は国立国会図書館、話題の公共図書館、特色ある専門図書館、史料館など、これまでに20数館を訪問し、見識を深めた。

2006年10月13日には「IFLA東京大会20周年記念懇話会」を開催。まだわが国図書館界が国際的認知に乏しかった1986年にIFLA東京大会を招致・設営して成功に導いた人々のお話をうかがった。また、この大会を一つの契機として、その後のわが国の図書館員の周囲に起こった変化やそれに対するチャレンジの跡を振り返る貴重な機会ともなった。パネルトーク後の質疑応答でも今後の図書館のあり方を考える様々な意見が活発に交わされ、印象深い会であった。

また図書館サポーターフォーラムは、記録管理学会、アート・ドキュメンテーション学会、日仏情報図書館学会など他の図書館に関わる団体

とも交流があり、今後も各種図書館団体のリーダーによる「図書館サミット」のシェ尔バ役を当会が務めるなど、様々な形で連携していきたいと考えている。

3. 図書館サポーターフォーラム賞

図書館サポーターフォーラム賞は、ユニークで社会的に意義のある各種図書館活動を表彰し、図書館活動の社会的広報に寄与することを目的として、図書館サポーターフォーラムが設立した賞である。

活動の中でも大きな柱であるこの表彰事業は、我々が現職中に成し得なかった夢を見たいと思ったことに発している。図書館はそれ自体が社会的な存在であるが、従来の枠にはまらないユニークな活動をしている方々、また社会的に意義のある活動をしてきた方々を表彰することにより、その活動を奨励し、その熱意に我々の夢を託すものである。図書館活動や資料の重要性を社会に広く訴えることにもなり、大げさに言えばこの国の文化のためにも意義のある表彰事業ではないかと考えている。

表彰は1999年からはじまり、現在まで9回を数え、別掲のように28名（団体を含む）を表彰している。表彰の候補はサポーターフォーラムの会員から募り、表彰委員会・幹事会の選考を経て、毎年の総会の席上、表彰式を行うことにしている。

4. 近年の表彰対象と傾向

2007年度、第9回図書館サポートフォーラム受賞者は次の三氏であった。

平井紀子氏（元文化女子大学図書館長）

・服飾専門司書としての業績・文献目録・索引の編集。特に服飾各国古典の解題の連載。

水谷長志氏（東京国立近代美術館主任研究員）

・美術ドキュメンテーションの先進的な取り組み、とくに有力美術館図書室間の横断検索の立ち上げ。

松岡資明氏（日本経済新聞文化部編集委員）

・ジャーナリストとして図書館やアーカイブズの重要性和その社会的意義を、紙面を通じて展開。

以上の他、歴代受賞者は別掲の通りであるが、ジャンル別に若干紹介すると、

1) 先進的な図書館活動として、病院患者図書館を率先実現した菊池佑氏、点字図書・録音資料の製作貸出し活動で福祉に貢献する本間一夫氏など

2) 国際的な活動分野では、ケニアの大学図書館設立支援の鬼頭當子氏、ラオス難民向け子ども図書館、出版活動を展開する安井清子氏など

3) 書誌・データベース関係では、「書誌の書誌」の構築・研究会活動を積極的に推進する深井人詩氏、銀行合併の変遷を網羅的に調査しデータベース化した藤田幸弘氏など

4) 地域活動関係では、「市民が主役」の理念で地域図書館を積極的に支援する、図書館

ともだち・鎌倉のグループ活動、共同保存図書館の実現を目指す東京多摩地域の「たまむすびの会」

など、極めて多彩である。歴代受賞者の受賞理由はホームページに記載があるのでご参照いただきたい。賞の設置理由に基づき、模範的というよりは革新的な、パイオニア的な活動をしてきた方への賞となっている。

受賞者の多くは受賞後も現在に至るまでさまざまな活動が続けている方が少なくない。ささやかな賞ではあるが、図書館の発展に少しでも寄与するところがあればと願っている。

5. 今後の活動について

当フォーラムも設立から11年目を迎える。何程かの支えになればと賞を贈った方々が活動に参加して下さったり、また人の繋がりが新しい人を迎えたりを重ね、現在の会員数は一一〇名を越える。事務局は現在、日外アソシエーツにお願いしている。

この11年の間に図書館と図書館を取り巻く周辺状況は大きく変わった。日々膨大な情報が生み出されていく現代社会では、資料の収集と蓄積、そして情報検索機能がより強く求められている。機能面・設備面の充実が目を見張るものがある。それでも我々の夢見た図書館はまだまだ完全には叶えられていないのである。なぜならこのフォーラムにおいて最新の図書館技術を学び、信念を基に新しい分野を拓いてきたライブ

ラリアンたちと交流するうちに、理想の図書館像は果てしなく創りあげられ、そして理念として受け継がれていくからである。今、ここから、何ができるのか。我々はそれを常に考えていきたいと思っている。共に図書館活動を支えていく志のある図書館人の入会を心からお待ちしております。

（『図書館雑誌』2007. 10月号に掲載）



第6回 (2004)

金沢工業大学ライブラリーセンター (竺 覚暁館長)

- ・日本のリサーチ・ライブラリー全体の地位向上に貢献した功績。

多摩地域の図書館をむすび育てる会 (代表：黒子恒夫氏)

- ・共同保存図書館をめざした東京都多摩地域の「たまむすびの会」の努力と先駆性の功績。

村橋勝子と「社史の研究」

- ・社史からの情報提供経験を基とした著書により、社史制作と活用法に光を与えた功績。

第7回 (2005)

菊池 佑氏 (日本病院患者図書館協会会長、IFLA常任委員)

- ・病院患者図書館の調査・研究・普及活動で常にパイオニアとして活動してきた功績。

京藤 松子氏(元アメリカンセンター資料室司書)

- ・アメリカンセンター資料室に33年間勤務、日米図書館界のかけ橋として尽力した功績。

小林 是綱氏(山中湖情報創造館館長)

- ・図書館IT化の推進や情報創造館の設立など常に先駆的な事業に取り組んだ功績。

第8回 (2006)

松岡 享子氏(東京子ども図書館理事長)

- ・「子どもの読書」を専門主題とした(財団法人)東京子ども図書館の設立・運営による功績。

近江 哲史氏(日本企業文化研究所所長)

- ・親しみやすい著作を通じて多くの人に図書館の魅力と重要性を広めた功績。

高橋 晴子氏(大阪樟蔭女子大学学芸学部助教授)

- ・服飾・身装分野における学問研究とドキュメンテーションとの融合を目指した功績。

第9回 (2007)

平井 紀子氏(元文化女子大学図書館司書長)

- ・服飾専門司書として目録・索引・文献解題等の作成を通じて新領域を開いた功績。

水谷 長志氏(東京国立近代美術館主任研究員)

- ・美術図書館やアートにおける先進的な取り組みや、関連団体の設立・運営に努めた功績。

松岡 資明氏(日本経済新聞 文化部編集委員)

- ・ジャーナリストとして図書館やアーカイブズの重要性とその社会的意義を訴えた功績。

第10回 (2008)

飯島 朋子氏(元・一橋大学附属図書館勤務)

- ・ブロンテ姉妹、ギャスケルの研究や文献目録、図書館に関する映画を調査・類型化した功績。

佐藤 正氏(ライブラリー・カフェ・ヴィッセン)

- ・司書という職業の持つ意義を生かしたカフェを考案、一つの拠点を目指し経営した功績。

肥田 美代子氏(文字・活字文化推進機構理事長)

- ・児童文学作家として、国会議員として、読書文化や図書館の振興に力を尽くした功績。

以上

図書館サポートフォーラム賞表彰者一覧

第1回 (1999)

遠藤 征広氏 (遅筆堂文庫)

- ・山形県川西町の遅筆堂文庫 (井上ひさし氏蔵書) の実現を通じて町おこしの功績。

鬼頭 當子氏 (MK図書館研究所主宰・元国際基督教大学図書館長)

- ・ケニア・デイスター大学アガベール図書館の設立を推進し、国際協力に尽くした功績。

濱田 敏郎氏 (前日本図書館協会利用教育委員会委員長・慶應義塾大学名誉教授)

- ・図書館利用教育ビデオ、ガイドライン等を通じて図書館活動の社会的認知を広めた功績。

藤田 幸弘氏 (前銀行協会図書館長)

- ・銀行の合併等の変遷を網羅的に調査し、データベース化した功績。

第2回 (2000)

本間 一夫氏 (社会福祉法人 日本点字図書館理事長)

- ・点字図書・録音資料等の製作貸出を通じて福祉の向上に寄与した功績。

三多摩レファレンス探検隊

- ・レファレンスの自発的な研鑽を続け、成果を共有して図書館活動の発展に寄与した功績。

安井 清子氏

- ・ラオス難民の子ども図書館活動、出版活動を通じて国際的貢献に寄与した功績。

第3回 (2001)

深井人詩氏

- ・日本における「書誌の書誌」構築と研究会活動を通じて図書館界に貢献した功績。

図書館とともだち・鎌倉

- ・「市民が主役」の理念のもと地域図書館をサポートする活動を行ってきた功績。

むすびめの会

- ・多文化サービスをめざした、図書館と在住外国人を結ぶ国際性豊かな活動の功績。

第4回 (2002)

財団法人 松竹大谷図書館

- ・国内随一の演劇・映画総合専門図書館を運営し、研究・教育に貢献を続けている功績。

立川とラオスを絵本で結ぶ会

- ・絵本を翻訳しラオスへ送付する活動を通じて、市民による国際交流を行っている功績。

渡辺 順子氏

- ・文庫の運営、ブックスタートや布の絵本普及など、子供と本を結ぶ活動を行った功績。

第5回 (2003)

新田 満夫氏 (雄松堂グループ代表)

- ・わが国の学術図書館界の蔵書構築に寄与し、フェアの開催を通じて発展に貢献した功績。

波多野 宏之氏 (国立西洋美術館)

- ・アートドキュメンテーション界における指導的役割と国際機関を通じ情報交流を促進した功績。

松下 鈞氏 (国立音楽大学図書館)

- ・音楽関係ドキュメンテーションを通じ、学生教育の向上、出版、知識の普及促進に努めた功績。

第10回図書館サポーターフォーラム賞 表彰式

2008年4月11日(金)

喜山倶楽部 光琳の間(日本教育会館内9階)

(1) 趣意説明(末吉哲郎代表幹事)

ただいまから、第10回、図書館サポーターフォーラム表彰式を行いたいと思います。

従来になかった大変ユニークな活動を展開され、新しく図書館活動の枠を広げられた方々を表彰することになっています。

図書館業務や図書館出身で他の仕事に転出して良い成果をあげた方々を対象としています。が、近年は図書館司書以外の方で図書館活動の発展に尽くした方も対象とした幅広い表彰となっています。

昨年は新聞記者の方を、そして今回は国会議員出身の方を表彰することになりました。

趣旨につきましては、ただいま申しあげた通りでございます。

表彰理由につきましては、表彰委員長の山崎さんから説明いただきます。

どうもありがとうございます。

(2) 講評(山崎久道表彰委員長)

高いところから恐縮ですが、表彰委員長を務めました中央大学の山崎でございます。

ただいま、末吉代表幹事から、趣旨について説明ありましたが、私の方からは、表彰の経緯と、祝意を申し上げたいと思います。

図書館サポーターフォーラム賞は十回目を迎えました。社会的に影響力があって、かつユニークな活動を展開された、主として個人を表彰させていただくことで、図書館の社会的な認知度の向上、あるいは、皆さんのご労苦に報い、励ますという趣旨で行っております。

本年二月の二十一日に行われた選考会におきまして、いづれ劣らぬ9候補について選考を行わせて頂きました。激論を交わしましたが、その結果として、今日お見え頂いているお三方に図書館サポーターフォーラム賞を差し上げることと決定いたしました。

お三方について、簡単に表彰理由を申し上げます。

皆様方には、表彰理由という一枚ものの紙とお三方についての資料がわたっていると思います。さすが資料の日外アソシエーツ、こういうものを全部つけてあるのがほかと違います。データの非常にしっかりした表彰だということとをアピールしたいと思います。

お役目ですので、表彰理由を読ませていただきたいと思います。事実関係に間違いがありましたら、恐れ入りますが、あとで受賞の言葉のときに訂正いただければと思います。

では、最初は飯島朋子さん。

一橋大学図書館の司書として永年勤められ、その間、多くの意欲的な業務報告を発表される傍ら、ブロンテ姉妹やギャスケルの研究や文献目録に関する著作を多数発表された。これらは、いづれも多忙な業務の合間を縫ってのものである。その一方、図書館や図書館員が登場する映画を狩猟し、その調査結果を類型化して発表された。このことは、図書館を社会に認知させる上で大きな効果があったと考えられる。

とこれが表彰理由でございます。

図書館の仕事というものが、どんなにすばらしいものなのか、なかなか一般の人に知られない。それに対して、何か回答を与えたとすれば、図書館で働いている皆さんが、ご自身の仕

事の中から得た知識や経験というものをいかにわかりやすく世の中に示すか、ということではないかと思います。

その意味で、飯島さんは、お仕事の中から書誌を作られる。あるいはお好きな部分があるのかもしれない。映画というものと図書館の関係について、とくにその映画の中で図書館がどこどのように扱われたか、ということ幅広く映画を涉猟され、類型化する大変野心的なすばらしい試みもされる。こういうことは、一般の社会に図書館を親しみのあるものにするうえで、とても大きな力になるのではなからうか、という風に思えます。

飯島さんのお仕事を拝見していると、私はかつて先輩から言われたことを思い出します。「仕事というのは、遊ぶような気持ちで仕事をして、遊ぶときは仕事をするような気持ちでしなさい」。これはどういう意味かというと、いい加減にやれ、という意味ではなく、常に遊び心をもって、余裕をもって、仕事をする。しかし、遊ぶときは遊びだからと中途半端にしない。一生懸命やらなければ、何だっけ面白くはないんだ、とこういう話なんです。

私自身もなかなかその境地に至らないんです。仕事はいやだなと思いがちで、遊びになつたら喜んでやる、とどうもよくないわけです。飯島さんはそういうところで、非常に素晴らしいプロダクトをおつくりになって、ご自身も周りも幸せになる。これはすばらしい、ということ、この賞を差し上げよう、ということになりました。

二番目は、佐藤正さん。

幹事の何人かはすでに佐藤さんのお店に行かれて、太鼓判を押されてるかもしれませんが、表彰理由を読ませていただきます。

大学で司書資格を取得され、都内の医学図書館、短大図書館で司書として永く勤務の後、コンピュータシステム会社に転じた。その後、「司書という職業の持つ意義を生かしたカフェを経営する」という年来の夢を実現させるために、会社を退職し、起業方法の研修、紅茶等食品提供に関する資格を取得した後、2006年4月に「ライブラリー・カフェ・ヴィッセン」を多摩市に開いた。カフェの心地よさ、ライブラリーの情報提供機能、コミュニティとしての人の交流という3点の明確で魅力的なコンセプトの元で運営されている。

ということでございます。

図書館の魅力を、本当に身近な生活のなかで生かして頂いていることが、関心を惹きました。図書館というものが、特別な物ではなく、みんなの生活、衣食住の中で、それとごく近い距離で存在して、しかもそこで図書館の魅力というものが、おそらく衣食住の楽しさとうまく融合するんじゃないか、という夢を実現され、形にした、というのがすごいと思うんですね。

それと、もうひとつ感心したのが、司書は経営が下手、というのが相場で、自分はレファレ

ンスの仕事するけどマネジメントはあんまりやりたくない、という方が多いんです。佐藤さんの場合は、そういう資格も勉強されたし、起業方法も一生懸命勉強されて、周到な準備の上でカフェの経営をはじめられた。

そういう意味で、図書館員がどんなふう起業しているのか、というひとつのモデルとして、受賞していただくのに値する、ということで、賞を差し上げるようになりました。また、もしかしたら、見学会でお邪魔するかもしれません。その節はぜひよろしくお願いしたいと思っております。

三番目は、肥田美代子さん。有名な方です。私から強調することはございませんが、一応、読ませていただきます。

児童文学作家であり、1989年参議院議員に初当選以来、国会において「国際子ども図書館」の設立に尽力されるとともに、「子どもの読書活動推進法」「文字・活字文化振興法」を議員立法として実現させる運動の先頭に立ち、両法を成立させた。2007年10月、両法に基づく実際の推進機関として設立された「文字・活字文化推進機構」の理事長に就任し、読書文化や図書館の振興に力を尽くしている。

ということで、肥田さんは児童文学のエキスパートで、ご自身の経験から読書や図書館の大切さを訴えておられる。

そういうことを外部から見ていると、ご自身

が身をもって、読書や図書館の大事さがおわかりになつてゐる方だろうと思います。その経験からにじみでるもので、あるいは訴え、あるいは世の中を動かそうとなさつてゐる、と思われるんです。

先ほど申しあげたように、確かに日本は情報資源について遅れております。図書館も数だけあつて、利用のされ方やサービスについて、また認知度の点からみると、十分満足な段階ではない。

しかしながら、肥田さんはそのなかで、読書だとか図書館の重要性について、形ある法律とかあるいは組織をつくつて、世の中に対して明確な力を伝えて頂いてきています。

そういう意味で、図書館員や情報専門家はもつともつと外部に、肥田さんを見習つてアピールすべきじゃないか、と思うわけです。

こういうふうなことで、日本というのは本當に文化国家なのか、図書館や法律が整備できていなくて、何が文化国家といえるんだろう、ということがあるとすれば、肥田さんは先頭に立つてそういう荒波と戦つて図書館の重要性をアピールしてくださつてゐる。これはぜひ表彰させていただく、とそういうことになりました。

お三方に共通してゐるのは何か、と私なりに考えてみますと、図書館や本の魅力を社会に伝えていくことだと思ひます。それを伝える術、やり方は自らのご経験に基づいておやりになつてゐて、しかもそうした活動が徐々に世の中を

変えていく、という確信をお持ちになつてゐる、という気がするんです。

これはまさに、図書館サポーターフォーラムの趣旨に合致する話でございます。お三方のやり方を見ていますと、いろいろなやり方で図書館の大事さが世の中に伝わつていく、それぞれ非常に違うタイプの仕事をなさつて、そして同じような果実を結ぼうとされてゐます。

今回の表彰は私たちにとつても、大変ありがたいということ報告申し上げ、お三方の表彰に対しておめでとうございます、と申し上げて、私の報告といたします。

どうもありがとうございます（拍手）。

（3）受賞の言葉

【飯島朋子氏／元一橋大学図書館勤務】

きょうは、身に余る賞をいただきまして、ありがとうございます。

文献目録作りは性に合つてゐるようですが、文章はあまり上手くありません。

研修で参加した東京大学図書館情報学セミナーで初めてコンピューターに触れ、このとき『一橋論叢』の記事を材料にしました。また井上如先生の指導の下で誌別索引についての論文を書きました。その後、学内の計算機センターで『一橋論叢』の執筆者別索引を作つたりしていましたが、深井人詩先生の研究会に参加させていただくようになり、ブロンテ文献目録に手を染めました。

やがて同研究会のメンバーの方が始められた図書館映画メーリングリストに加わり、自分なりの図書館映画のリスト作りを始めました。このリストを印刷して本の形にしてみました。自費出版本として発行するようになりました。本は最初に日外から出していただいたブロンテの目録1冊をのぞいて、全て自費出版です。職場を定年退職後は、パク・ヨンハの文献目録作りに熱中していますが、それが完成したら、また図書館映画の本を書きたいと思つてゐます。

【佐藤 正氏／ライブラリー・カフェ・ヴィッセン経営】

ただ今ご紹介にあずかりましたライブラリー・カフェ・ヴィッセンの佐藤と申します。

本日は、大変光栄な賞を頂きまして、誠にありがとうございます。

実は、前もつてフォーラムの事務局の方から、受賞のスピーチをと、言われてゐまして、何を話そうかと思つて、過去に受賞された方々のスピーチをフォーラムのホームページで拝見いたしました。皆様非常に謙虚なスピーチをなさつてゐますが、私などは、まさに青天の霹靂と申しましょうか、戸田先生からもご連絡いただきましたが、はたして私に受賞の資格があるのだろうかと思ひました。

若作りをしておりますが、実はかなり長く図書館業界で仕事をさせていただいております。ただ長いだけで、最初に私立大学の薬学部

書館に就職したのは昭和55年、西暦ですと1980年になります。それから、医学部の図書館に転勤になり、その大学を退職して都内の短期大学の図書館に転職いたしました。カフェを開業する前は、図書館システムの会社に9年程勤務しておりました。

なんだかんだで、かれこれもう28年になりますが、ただ単に長かっただけで、このような名誉ある賞を頂けるのは本当に光栄の限りです。

ご紹介で、現在ライブラリー・カフェを経営とありましたが、ここから都営新宿線でほんどん西へ行つたところの多摩ニュータウンの永山と言う駅の近くで営業しております。ここにいらつしやる戸田先生、青山学院大学名誉教授の古賀先生には、遠方にもかかわらずカフェに出で頂きました。また、図書館システム会社に在職していた時にお世話になりました元三井住友海上情報センター長の植村様にもお出で頂きました。3人の方がお店の様子や、コンセプトを評価して頂いた事が、今回受賞の推薦を頂いたところではないかと、思っております。

開業して2年になりますが、意外に図書館の機能について、カフェにいらつしやるお客様があまりご存じないのに驚かされました。やはり市の図書館での利用と言うと、新刊の貸出を期待している感があります。近隣の図書館では、インターネットで蔵書検索が出来ますよ、とか、最近では大学図書館も市民に開放しています、と教えると驚かれます。カフェが図書館との橋渡しの役割が少しでも出来ればと思っております。

これからも皆様にご指導、ご支援を頂きながら、長くカフェを営業出来ればと思っております。ただ、なかなかカフェの経営も難しいですね。飲食業の経験は学生時代に少しありましたが、飲食だけで経営をまかなうのは、なかなか難しいですね、ようやく2年経過しましたが、今日も実は、3時まで営業してまして、この授賞式に参加する為に、3時以降は臨時休業して来ました。今日は、皆様にお会いするのを楽しみにしていました。本日は、本当にありがとうございます。これからもご指導宜しくお願いいたします。

【肥田美代子氏／文字・活字文化推進機構理事長】

肥田美代子でございます。考えてみますと、小学校時代の皆勤賞以来、賞らしきものをもらった記憶がありません。国会議員生活は衆・参合せて15年間になります。児童文学の先輩では、山本有三さんという大家が参議院にいらしたそうです。

私は野党議員でしたが、政権与党をこつぴどくせめたてるのが苦手で、あえて超党派の皆さんにご協力いただける仕事をしてまいりました。読書関連の二つの法律も、国際子ども図書館の設立も、その流れの中で出来たものです。私が政治生活に終止符を打って後、この二つの法律を、民間の力で実体化していこうという動きが出てまいりまして、財団法人「文字活字推進機構」が立ち上がりました。昨年10月のこ

とです。

会長は資生堂の名誉会長の福原義春さん、副会長はペンクラブ会長の阿刀田高さん。理事長は私ということで出発しました。その設立の際の基金集めに智恵を貸して下さったのが末吉哲郎さんだったのです。東京都写真美術館の寄附集めに奔走された実績があったからです。

この機構の面白いところは、新聞、出版、図書館という活字文化に直接関係の深い団体のみならず、自動車や電機、医療や、広告、放送、労働組合までが「一緒にやろう!」といって下さったことです。まさに異業種間の連携が生まれたのです。

言葉の劣化、日本語の衰退が、今、日本の最大の問題だと、皆が認識しはじめたということです。言葉は人を作り、人は言葉によって生きていきます。そのところが危うくなれば国は滅びます。どんなに経済が豊かになってもです。

私達、一人一人が「言葉の輝く国・日本」づくりをめざして何かをしなければいけない、そんな気がしています。

幸い、今日から、私も皆様のお仲間に入れていただけるようです。図書館にかける皆さんの情熱を、私も少しだけ分けてもらって、力いっぱい仕事をしたいと思っています。それにつけても生まれて初めての賞をいただいたことは何よりの喜びでございます。本当にありがとうございます。

図書館サポーターフォーラム規約

二〇〇四年一月二十一日制定

第一条 (名称)

本会は図書館サポーターフォーラムと称する。

第二条 (目的)

図書館活動の支援を行うとともに、会員相互の親睦をはかることを目的とする。

第三条 (事業)

前条の目的を達成するため次の事業を行う。

- 一、図書館活動の表彰
- 二、見学会・研究会の開催
- 三、懇親会の開催
- 四、機関誌の発行
- 五、関係団体との協力
- 六、その他本会の目的を達成する事業

第四条 (会員)

図書館および図書館関連業務（教育・出版等を含む）に従事した経験を持つもので、本会の趣旨に賛同する者によって組織する。

会員は次の二種とする。

- 一、正会員 所定の会費を納入する個人
- 二、賛助会員 本会に特別の援助を提供する個人または団体

第五条 (会員の権利)

会員は次の権利を有する。

- 一、機関誌への投稿
- 二、本会開催の見学会、研究会への参加
- 三、総会への出席および議案の提出
- 四、本会役員の選挙権および被選挙権を有する

第六条 (入退会)

本会に入会を希望するものは別に定める入会手続きによって申し込み、幹事会の承認を受けるものとする。退会を申し出る際は退会届を提出するものとする。会費を滞納したときは退会とみなすことがある。

第七条 (役員)

本会の役員は一〇名以内、会計監査二名とする。役員の任期は一期二年とし、再選を妨げない。役員の選出方法は別に定める。

第八条 (幹事)

幹事は幹事会を構成し、本会の運営に当たる。幹事会のもとに必要なに応じて委員会をおき通常の会務を処理することができる。

第九条 (代表幹事)

幹事会において代表幹事一名を互選で決定する。代表幹事は本会を代表する。

第一〇条 (会計監査)

会計監査は本会の会計を監査する。

第十一条 (総会)

総会は代表幹事が毎年一回召集し、委任状をふくめて会員の五分の一の出席によって成立する。本会の事業計画、予算、その他の運営方針を審議決定し、決算を承認する。

第十二条 (事務局)

本会の事務局を東京都内におく。

第十三条 (会計)

本会の経費は、会員の会費、その他の収入による。

第十四条 (会費)

- 本会の会費は、以下に定める。
- 一、正会員 年額二、〇〇〇円
 - 二、賛助会員 年額一口一〇、〇〇〇円

以上

文 集

— 10 年を振り返って —



ケセラセラ

井上 如

あらかじめお断りするが、この綴り方は本誌「ふぉーらむ」の一号から四号までに既に筆者が書いたことの二番煎じ、焼き直しである。多少目先を変えたに過ぎない。書く方だつて原稿料も呉れないのにそんなにオリジナルばかり書く訳には行かない。本誌の内容も押しなべて経年劣化が進み、延びきった輪ゴムみたいになってきている。嘘だと思つたらいちど集まつて合評会などやってみたらどうだろうか。それでも読みたいと言う縁なき衆生は、筆者に関しては一号から四号までの拙文に目を通してからにして頂きたい。

慶応の図書館学科に入ったら、一級上の幸田さん、藤本さんたちが人形劇団「ビプリオ」をやっていたので入団させてもらった。「和尚さんと小僧さん」という出し物があつて、和尚の役は、クラスは同級だが歳はいくつか上の伊藤順さんで、自分は小僧の役を演じた。

これは当たり役だといわれた。そりゃそうだろう、生来の天邪鬼が芝居でも天邪鬼の役をやつたのだから。ある日、お座敷の掛かった暗れの舞台で、自分は手に持っていた小道具を客席の側に落としてしまった。そしたら客席の一番前で見ていた子供が走つてきて、拾つて手渡

してくれた。その場で「アリガトウ」といったので客席は大笑いだった。会場は横浜市立図書館だったと記憶する。団には、クラスメートで岡田さんという女性がいて万事にわたり天才だった。いちど競演したこともある。彼女は和尚役を志願し、それを苦もなく演じて見せた。天才には生まれつきすべてが備わつていて、あとはそれがautomaticに発現してくるだけだ。天才とは、努力と無縁の存在だということを彼女のおかげで納得することができた。われわれ学科の五期生は、先輩後輩からゴキブリと呼ばれて罵られたが、彼女一人が出世して辛うじて面目を保った。

米国留学の二年半はアリゾナ、ニューヨーク、シアトルを点々とした。もちろんアリゾナが最高だった。留学から多くを学んだが、その成果に気が付いたのは留学から帰つてだいぶ経つてからのことで、滞米中はたった三つのことしか記憶にない。その一は、図書館員を専門職と称しているのは図書館員自身と、そのアジテーターとしての図書館学の教師だけで、米国の職業社会学では、図書館員は看護婦と並んでセミ・プロフェッショナルに分類されること、その二は、米国の図書館職員が女性ばかりである理由として、①離婚したりされたりして生活

に困った挙句、収入を得るためのいちばん安直な方法が図書館員の資格取得だから、つまり図書館は第一義的に離婚女性のためにあるという理由と、②一方で、図書館学の元祖で十進分類法の創始者であるメルビル・デュイイがたいへんな美男子であつたからという理由が併存していることで、この点は、新刊で当時評判の精神分析学者の書いたデュイイの伝記の巻頭に、教室でたくさん美女に囲まれている彼の写真があり、文中にもこの二枚目が、長年にわたつて図書館アマゾネスの世界に君臨したと書いてあつたので、②の方が正しいと知った。その三は、米国では日本と違って、図書館員と言う職業は人間の屑がなるものというリアリズムもちゃんと通用することであつた。

シアトルにいた頃は友達に車に乗せてもらつて、二人でよくmushroom huntingに行つた。場所にはレニア火山の裾野近くで、面白いように採れた。仕事なんかそっちのけだ。Chanterelleという名前の茸で日本では「アンズタケ」という。その美味さといつたらない。松茸など問題にならない。焼いて醤油をつけて食うだけだが、帰ると夕食の時間など待つておれず、すぐに食い始める。腹いっぱい食つて、一眠りして、それから起きて夕食だった。松茸を採つてニューヨークの日本食料理店へ送ると言うアルバイトがあるにはあつたが自分はやらなかつた。獲物を採るだけではつまらない。あたりに生えている茸という茸をみんな採つて、かえりに大学のmycologyの教授の研究室に寄つて、edibleか否か、edibleなものは美味いか不味いか

を分けてもらう。たった一シーズンだけだった
がすばらしい経験をさせてもらった。その友達
は遊びが過ぎてハワイで死んだ。

帰国後は専門図書館の現場を点々とした。情
報資料研究会(JSK)というのに誘われて入
会し、そこで米国での経験を踏まえて無人図書
館論を唱えた。昭和五十二年の暮れに、それま
で二十年間暮らした図書館の現場を去り、大学
へ移った。そこで自分の無人図書館論が読まれ
て、それなりに評価されているのを知ってびっ
くりした。折から機械可読目録や目録所在情報
システムに陽が当たり始めていたからである。
当初は、大学図書館から目録課長を追放せよ、
なかなか叫んでさえいれなかったが、だんだ
ん化けの皮が剥がれ落ちた。そこで一計を案
じ、「仕事とは本来有能な人間がやるもので、
無能な人間はその邪魔をしないことが仕事だ。
無能な者が有能な者に立ち代わってあくせく働
こうとするくらい惨めなことはない」という処
世訓を声高に主張した。これは無人図書館論同
様全国の大学図書館に受け入れられたが、いく
ら正しいことを言っても、言う本人次第で受け
取られ方はまるで違う。あるとき、その無能な
者というのは自分自身のことですか? という
意味の質問をフロアから浴びせられてギャフン
となって、以後、大見得は切らないことにした。
やがて勤務先に身を置いたまま、味の素社の
食の文化センターに国内留学をすることになっ
た。かつてJSKの10周年記念の時、飯田賢一さ
んが「10年史」を編み、自分がその「あとがき」
を分担した中でJSKはアウトローの集まりだ

と書いたが、それが誉め過ぎだったことを後か
ら知って悔やむ毎日だった。味の素社のフォー
ラムはそれこそ真正正銘、第一級の知的なアウ
トロウの集まりでたいへん楽しい思いをした。

サラリーマンを辞めるのにあわせて「本」を本
格化させた。いつ頃から歩いているかという愚
問は行く先々でよく受ける。面倒だから、「産
まれる時におふくろの胎内から自分で歩いて出
て来ましたが、それ以来歩いています」と答える
ことにしている。宗旨の如何を問わず、自分く
らい全国津浦浦の神社仏閣を訪れている者も
少ないだろう。もちろん用足しのためである。
また、ご本尊の参拝は遠慮するが、寺シヨンの
仁義で胎内くぐりをかならず試みることにして
いる。もちろん産まれ代わるためである。死ぬ
時もちろん蓋の開いた棺桶まで自分で歩いて
行くつもりだが、産まれる時は臍の緒が足に絡
んで転んだのを母親にこっぴどく叱られたの
で、今度は桶の縁に蹴つまづいて転ばないよう
に、そのためには脚・足を鍛えておく必要があ
る。だから毎日せっせと歩いている。

本格的に「本」を始める前も、海外出張の折な
どにできるだけ一人旅になるように企画し、歩
くための身の回りの品々でスーツケースを一杯
にして出掛けた。出張の日程は歩くための休日
確保を優先した。しかし行く先はニューヨーク
、ロンドン、パリほか海外の大都市と大学所
在地に限られ、今のように山の中を歩き回るこ
とは出来なかった。例外はソウルとモンテカル
ロで、ソウル郊外では山の中のセミナーハウス
に招待者を缶詰にして開いた国際会議だったの

で、期間中、朝夕一人で「本」を堪能した。モン
テカルロは国全体が崖で出来ていて、国王の王
宮以外に平らな所はないから、これも「本」を堪
能できた。歩きについては面白い話が売れるほど
あるので、それを今「本」に書いているところで
ある。

40字×78行。もう字数制限を三行オーバーし
た。「ふおーらむ」の原稿と言うといつも動物
のことを書きたくなる。なぜなら動物は働かな
いからだ。働くのは人間だけだからだ。動物は
働かなくても食っていける。人間は働かなく
ちや食っていけないが、さいわい、生きるため
などと高望みさえしなければ、死なないでいる
という程度でいいなら、働くことは誰でも出来
る。しかし遊ぶのには才能が要る。ハチやアリ
は働くと言う人がいるが、あれは動物進化の袋
小路に迷い込んだ挙げ句、働き蜂や兵隊蟻の大
量発生を算段して、辛うじて生き延びている特
殊な動物だ。もつともその意味で人間が三番目
の特殊例だという見方も有り得よう。

しかし自分を振り返ってみても、勤め始めた
ときに洋書の目録を五、六冊取ったときり、あ
とは働いた覚えがない。この調子だとこれから
嫌というほど長生きする危険があり、医者も、
「気をつけないと120歳にもなつてまだ病氣
一つせず、元気なままだったらどうする。その
可能性が高いよ」と言つて脅かすのだが、心配
御無用。そんなこともあるうかと思つてかねて
から、自分にいちばん合ったライフスタイル、
One person教無手勝流免許皆伝の秘法を解会
してきたのだ。

田山花袋「蒲団」のモデル岡田美知代と兄岡田実麿

植村 達男

今から百年以上前の一九〇七年（明治四十一年）、田山花袋（たやま・かたい、一八七二年—一九三〇年）が、小説「蒲団」を雑誌「新小説」に発表した。妻子がある中年の作家（田山花袋の分身と思われる竹中時雄）が、若い女弟子横山芳子へ切々たる恋情を寄せる。そんな赤裸々な心のうちを書き綴った作品である。当然のことながら、文壇にセンセーショナルな話題を提供する。同時に賞賛と嫌悪感の渦巻く賛否両論の大反響を社会全般にもたらした。現在なら「どうってことない」小説であろう。しかし、日露戦争が終わったばかりという時代背景を考慮すれば、文壇内外の「大騒ぎ」は理解で



きよう。文学史上「蒲団」は、自然主義文学の代表作として後世に名を残し、今日でも岩波文庫の一冊（「蒲団・一兵卒」）として比較的容易に読むことができる。しかも、この文庫本は二〇〇二年秋、森岡外『雁』、島崎藤村『破戒』等他のロングセラーとともに新刊として改版本が発行された（写真）。ちなみに、『蒲団・一兵卒』の岩波文庫の初版が出たのは、一九三〇年（昭和五年）のことである。

「蒲団」の女弟子横山芳子にはモデルがいる。田山花袋の自宅に寄宿して、文学上の指導を受けていた岡田美知代だ。この女性が小説「蒲団」のモデルとなった人物である。「蒲団」の芳子は岡山県新見市の出身と設定されている。しかし、モデルとなった岡田美知代の出身地は、同じ中国地方の山間地である広島県甲奴郡上下町（こうぬぐん・じょうげちよう）だ。美知代は、地元の小学校を卒業すると英語教師をしていた兄実麿（じつまる）を頼って神戸に行き、米系ミッションスクール神戸女学院で学ぶ。そこでキリスト教布教のために来日した宣教師たちにより教育を受け、ハイカラな学校生活を送る。美知代は神戸女学院の母体でも

ある神戸教会（西日本最古のプロテスタント系の教会）に出入りし、そこで同志社の学生永代静雄（兵庫三木出身）に出会う。永代は「蒲団」では恋人田中秀夫として登場する人物である。小説の上での横山芳子は、「大胆な女」、「飛んでる女」として描かれている。このことによりモデルの岡田美知代は世間から白い目で見られていたようだ。一九九二年に創元社発行からされた協会史『近代日本と神戸教会』には、永代静雄と岡田美知代の写真が、「蒲団」のモデルとして掲載されている。

岡田美知代の兄岡田実麿（じつまる）は、「蒲団」の中にもモデルの兄としてチャリと出てくる。例えば、「総領の兄は英国へ洋行して、帰朝後は某官立学校の教授となっている」という部分。現実の実麿は、当初神戸商業学校（現県立神戸商業高校）で英語教師をしていた。一九〇二年（明治三十六年）に、東京高等商業学校（現一橋大学）に次いで、神戸に第二番目の神戸高等商業学校（現神戸大学）が設立されたのを機に同校の教授に就任する。岡田実麿は、同志社、慶応義塾で学び、更に（「蒲団」の記述のように、英国ではなく）米國オハイオ州オベリン大学でバチャラー・オブ・アーツの学位をとった。当時としては、先端を行く英語教師であった岡田実麿である。日本の英語教育については、「読解に偏することなく、書くことや会話（聴き、話すこと）も重視すべき」というのが持論。今でこそ、当然のこととして受け入れられる考え方であろうが、当時と

しては異端で少数意見であったことが十分予想される。

一九〇七年（明治四十年）九月、岡田実麿は旧制第一高等学校（現東京大学）講師となり上京する。実麿のポストの前任者は夏目漱石。実麿は朝日新聞社に移った漱石の後釜に座った訳である。一方、英語教師を辞めた漱石は以後文筆に専念、「三四郎」、「それから」、「門」等の作品を発表していく。その後、岡田実麿は明治大学予科教授となる（年月不明）。一高を辞めた理由は分からない。私立の学校で学び、米国留学経験がある異端の英語学者だった岡田実麿である。官立学校の雰囲気になかったのであろうか。新しい職場である明治大学の同僚に山崎寿春がいた。実麿は山崎が設立した東京高等受験講習会（現駿河台予備校の前身）でも教えるようになる。『駿河台学園八十年史』（一九九九年）によると、岡田実麿は一九三九年（昭和十四年）頃まで同校で教えていた。予備校では看板教授。講義は名講義だったと回想する往時の予備校生もいる（前掲書）。『英文和訳要訳』、『和文英訳教材』等の著作も多数ある。しかし、岡田実麿の名は二十世紀初頭の今日、殆ど忘れられてしまっている。その原因は、予備校で教えていた期間が長かったからに違いない。

岡田美知代は、恋人永代静雄と結婚し一児をもうける。その後離婚してから「主婦の友」の記者として米国に渡り、現地で花田小太郎と再婚する。終戦直前に帰国し広島県庄原市に住

み、一九六八年に、この地で死去した。したがって、明治末期に書かれた小説「蒲団」のモデル岡田美知代は、東京オリピックをテレビで見ることできた。そして、大阪万博が開催される二年前に死去したことになる。師と仰ぐ田山花袋が書いたスキヤンダラスな小説「蒲団」のモデル。岡田美知代は、生涯このレッテルを貼られて生きていかねばならなかった。自らは「私は、そんなふしだらな女でなかった」という趣旨文章を書き、公表もしている。しかし、名誉回復に至っていない。最近になって、岡田美知代の故郷上下町が旧岡田家を「上下歴史文化資料館」（写真）として改装し資料の収集・展示を開始している。今後は、岡田美知代の生涯と小説「蒲団」の実像と虚像の違いに関する研究が進んでいくに違いない。また、先駆的英語教育者であった兄実麿についても、その全貌が明らかになっていくであろう。



図書館への我が思い出、図書館巡礼、など

—友人への手紙から—

恵光院 白

前略 本日は貴兄の手紙への返事として、以下我が母校の旧図書館の思い出などを綴ります。先ずはご覧ください。本当に懐かしい時代、場所です。多分当時、大学間有数の、広く、荘厳な場所だったと思います。その部屋に初めて入った時の事です、ゴシック大聖堂内かとも思える大閲覧室、巨大にして黒光りするテーブル、ほの暗く閑ずやかな時間、上部がアーチ形の窓から見えるO講堂の高塔、そこで学問というものの何やら畏れと、それ以後の標（シルシ）への永く、遠い道のり等をそこはかとなく深く得心した、ような気がしました。先輩諸兄の霊がそこ此処に宿ってるような錯覚を覚えました。実際その部屋で勉強らしきこともしましたが予想に違わず、我が在室全時間の多分約四分三は眠っていました。何を隠そう、アルバイト専門のいわば天ぷら学生でした。お金はそこそこに入りましたが使う宛も時間もなく、つまらぬものを買って粹がついていました。

同室内には大学創設者の礼装、立姿の銅像が置かれ、同夫人の肖像画（上品なお顔立ちでした）が掲げられているのみで、他には確かに花も装飾もありませんでした。出入口の上には秋艸道人・會津八一の大書「名著大作」が掲額さ

れていました（蔵書中の名著十大作を繙いて勉学せよ、無学な者たちよ、との意味だったでしょう）。いやそれとも自ら名著大作をものにし、世に問うべし、という励みだったでしょうか。

在学期間中、同館の前の広場は多数の大型の立看板が四辺を囲み、毎日のように学費値上げ反対、大学解体、安保反対、産学共同反対、大学制度改悪反対、学生会館自主管理要求等々（雑多なテーマが噴出していました）のデモ集会が開かれて、常に騒然とした現場でした。何しろ各セクトの本部が学内に群論割拠してしましたから、そのセクトごとに集会を開くわけです。セクト間では口論はあつても、まだ醜い抗争にはなっていない時期です。窓から入るスピーカーの狂音と反比例するように、館内、大閲覧室は静寂そのものでした。小生などはヒョリスト・ドジカル（日和見で十お間抜け、当時の俗称、戯れ語）でしたから、館入口の階段に腰掛け、バカヅラ引つ提げて日々演説、騒動を眺め（因みにその現場でのチラシ類をその時全部集めておけば、今では凄いいアークイブ資料になっていた筈）、且つ大閲覧室でバイト疲れで眠っていました。また当時、ご指摘の様に図書

の館外貸し出しはしてはなかったので、店頭で買う自分の本の選書にとつては、かえって良かったと思います。岩波、筑摩、みすず、未来社、中公、美術出版社、研究社以外は買わない、（当時の）千円以下の本には注意せよ、買う気になつてから別の三日、三回立ち読みしてからにしる、古書店を必ず廻れ、など懐かしいプチ・ルールでした。しかし人生後年、変にお金を使えるようになると、俗本に我が家の書庫が占拠され、悪い中毒が体と心と眼とを蝕みました。言うなれば図書館人は変に本を持つてはならないのです、「何様？」にはなつてはならないのです。しかも読まない本のためにです。回想を続けましょう。その頃には既に蔵書の電算化に向けてか、パンチカードの為の縦長カードが図書貸出しの際、閲覧者に一冊、一冊記入する事が課せられていました。もう四〇年も前でしようか。旧目録カードはNDC分類ではなく、イロハ分類でした。また右肩が波のようにへこんでいるもの、墨と筆の細字で書かれたもの、ペン十書きのもの、それに和文タイプ文字のコピーのカードなどが混配されていました。既にコピー機が鎮座して、一枚一〇円でもやはり高い感じでした。学食の昼定食が五〇、七〇円の時代だったのです。

院生になりますと、中央図書館の書庫への入庫が許されます。ある日恐るおそる、書庫に入ってみました。膨大な量の図書の大群に圧倒され、何階もの、何層もの延々と続く書架列と狭くて狭い横に這わせる小径とに、目眩（メマユ）がしました。流石に歴史ある大学の図書

館、書庫なのだ、と一人納得しました。納得はしましたが、人気アイドルや面白タレントの本が出版されるような世情（二〇〇八年注・当時、そのような本自体の所蔵を確認したわけではないのですが）の一方で、

「お前の本が、この大書庫の中に只の一冊も、無いじゃないか！、バカヤロウ！」、という動かぬ現実を眼前にして、己れに対して苛的な憤怒がこみ上げてきました。

「必ず、かならず、このW大学・中央図書館の書庫に、俺の本を納めさせてやるぞ！」、といういわば漠然とした、しかし絶対の野望を無音で怒鳴っていました。出来るならば書庫の中で埃（ホコリ）をかぶっている本ではなく、平常利用者の目に触れて参考調査室で活用される本を、と。目立ちたがり屋、出たがり屋（しかし意味の無いそれ）という後年の流行語に、小生もしつかり該当したことになります。

ところで小生これ迄、表敬訪問、調査入館した公立系図書館の略称を並べてみます。数の多少は分かりません。専門が美術系なので、美術館入館に比べても小生的にはよく行っているかと思ひます。特に最近はそのようです。以下、◎大いに参考にすべき館、○頑張っている館、△はややお疲れ気味の館、また或る部分？の館、☆は見学ツアーでの館の印です。

*北海道：道立図書館（江別市、△）、札幌市立図、旭川市立図、

*山形県：県立図、小松町図（○）

*宮城県：県立図（△）、仙台市立図☆、文学館（△）

*茨城県：県立図（旧）

*千葉県：県立図（△）、香取市佐原図（△）、館山市図（△）

*埼玉県：狭山市立図、同分館、川越市立図、所沢市立図（旧、新、△）、飯能市立図、

*東京都：都立中央図（◎、港区）、同日比谷図（旧）、同多摩図（立川、△）、新宿区立図、同区御苑前図、渋谷区立図、同笹塚図（△）、世田谷区立梅ヶ丘図（△）、港区立図、墨田区立緑町図（◎、△）、板橋区立図（旧）、文京区立本郷（旧、新）、同小石川図（旧）、中央区立図、同日本橋図（○）、千代田区図（旧、新）、町田市立図（◎）、同文学館（△）、小平市立図（◎）、西東京市図（△）、

*神奈川県：県立横浜中央図（△）、鎌倉市立図（△）、

*長野県：県立中央図、須坂市立図、上田市駅前図（○）、軽井沢町立図（○）、

*新潟県：長岡市立図、三条市立下田図（しただ）諸橋轍次記念館、

*山梨県：山中湖町立図☆、

*静岡県：三島市立図（◎）、

*愛知県：県立図（◎）、

*富山県：県立図、

*滋賀県：県立図瀬田（△）、

*京都府：府立図（旧、新）、

*大阪府：府立中之島図、府立図（東大阪市、◎）、

*福岡県：県立図（旧）、

それに福島県南東部・矢祭町の自主（町民

の）図書館も行ってみたい館です。ついで乍ら日本図書館協会ビルの二階の壁面にかつて貼っていた、公立図書館を持たない自治体の白地図が記憶から消えません。また通例の書籍とは別に国書・古典籍系や漢籍の入力など、全国レベルでの公立・大学・専門の各図書館の現在の進展状況も、気になるところです。

ところで拙文をしたためていた実にその日、テレビ番組（二〇〇七年一〇月三十一日夕方のニュース番組、10チャンネル）で全国の町々々へ、僻地へ本を積んで（水車のような回転本棚）自転車で巡り、住民に会い、本を寄贈、永久貸し出し（貸し回しの促し）している二八歳の青年のことが、紹介されていました。彼は各地でアルバイトをこなしながら、本を買い足しながら、全国の全ての図書館を、特に村々の図書館を風雨について自転車で廻り、或る「図書」（書名失念）の購入を働きかけるという、もう一つのキャンペーンも重ねていたのです。頭が下がります。読書という知の営みの究極の原点を体得している僧、雲水のような人でした。スゴイ人です、小生、TVの前で思わず涙しました。彼一人の前に、われわれが懸命に（いい加減に？）学んできた図書館学なんかとか情報学なんぞは、戦わないうまま惨敗していたのです。今すぐにでも白旗を挙げなければならぬのかと。嗚呼、嗚呼、…。（朝日新聞）

一月〇五／〇六日頃、朝／夕失念、に記事掲載）
またまた、くだくだしくなりますので、本日はこれにて。いづれまたお手紙します。草々

図書館のある風景（その二）

近江 哲史

1 図書館への道

私の特技と思われるものの一つ（二つ目といって、もうないのだが）に、他人から道を聞かれる、というのがある。若い頃、友人と歩いていた時も他人が私に道を聞いた。「君は、よく人に道を聞かれるなあ」なるほど、そうかも知れない、と私は初めて自分がそんな特技を持っていることを意識した。爾来、確かに平均人以上にそういうことが多いのだと思っている。東大卒業生でもないのに東大構内で「数学教室はどこですか」と聞かれたし、都心では「トウキョウ・インペリアルホテル？」とか「トヨタ自動車はどこですか」と外人に聞かれ、山中では「股道でどちら？」とハイカーに聞かれたことなどである。

人は道を尋ねる時、その人が①ネイティブであること ②人品温和で癡猛でなく、やさしく事を教えてくれそうだという期待が持てること ③その他この人に道を聞いても厄介な問題は起こらないであろうこと この三点を直感的に判断してのことだと思う。どこであつても私が現地に詳しく見えてるのは我ながらすごい！

私は常に「人に道を教える道（どう）」に精

進んでいる。相手によつて、三分も歩けば、という場合と、距離でザッと二百メートルほどです、と言つてあげる方がよい場合がある。それは相手を見なければならぬ。また人によつて目印が気がつきやすいものを教えてあげる方がよい。おばさんならば、××スーパーを左に曲がつて、とかである。逆に警察官に道を尋ねてみると、「信号三つ目を左に曲がつて・・・」などと客観的な教え方をする。道を聞かれるのも、①店とか家とかもつとも具体的な物件の所在を聞く ②「この辺りに郵便局はありませんか」など用件がらみで聞く ③高度なソフトがらみ、例えば「この駅の近くにうまいそば屋がないかねえ」など付加価値を求められる場合などがあり、聞かれれば自分の知識・教養を最大限に駆使して意に合うように配慮してあげねばならぬ。

さて、図書館への道。私は市内のある分館のまん前で「この辺りで図書館はありませんか」と聞かれたことがある。分館はたいいてい公民館とか市の建物の間借りをしていることが多い。その場合ほとんど図書館分館の表示を表に出してはいない。この手の不親切は実に多い。その後図書館に交渉して看板を出して貰うようにし

た。かの有名な千葉県立浦安図書館でも当該バス停に着いて、降りて、さて？ とグルリと探してもなかなか分からなかった。建物というのは裏側にいると、全然その姿が見えず、どこなのかさっぱり分からないのである。

そして図書館におけるレファレンス、これには①何々という本はどこにある？ ②何々に関する本はあるか？ ③何々について知りたいというのが三大質問だそうだが、これこそ私が道を聞かれたあの要領に近い。図書館職員は、私が「人に道を教える道（どう）」に励んでいるように、レファレンス道に励んで頂きたいものである。

2 逆万引き

先年、日経文化欄の記者から本の処分の方法を問われた。「捨てます」と言ったら、その方法はと聞くから、在職時代など外出が多かった時期には、毎日捨てていい本は電車の中で再読し、これで未練がなくなるから駅の屑箱に捨て去ります、一日一冊でも徐々に減りますから、と珍妙な返事をした。新聞には言つた通り出ていた。

そんなことを思い出していたら、チャリと「逆万引き」という言葉を小耳に挟むことがあつた。本を買つて読み終わつたら、よい本は勿論そのまま残すが、そうでないモノは買った本屋に行つて、そ知らぬ顔で元の本棚に戻してしまふというのである。（実話ではないと思うが。）なるほどその手があつたか、と私は考え込んでしまった。図書館でこれをやつたら、相

当さばけるぞ。自分の蔵書を日本十進分類法に従い、その図書館のラベルを偽造してそれぞれの書架に放り込む。やあ、これで年間相当の蔵書を減らすことができる。だって、本をまともに図書館に持って行ってもこの頃はほとんど受取ってくれないし、リサイクルへまわしてくれる所もあるにはあるが、どうも所作がアイマイで気に入らないのだ。

まあ、現実にそんなことをやっちゃいけませんよ。以上超ムダな話でした。

3 『ライフ』誌一九五〇年三月二十七日号

二〇〇五年五月二十五日民放テレビで放映された「トリビアの泉」(七四〇番)は「十五人全員が別々の理由で遅刻したため爆発事故を免れた聖歌隊がいた」というものである。これはテレビ上でその後も出たし、活字にもなったから、知っている人も多いだろう。

内容は後述するが、この話の原典を見たいと思つてネットを見ると、それは『ライフ』誌の一九五〇年三月号に出ているという。ならば簡単に現物が入手できると考え、国立国会図書館に行き調査を願い出ると、それは関西館にあるといい、送って貰つて見ると、事務処理の混乱で的確な雑誌が出て来なかった。初めて知つたのだが、『ライフ』誌には四版あるのだ。①発行地シカゴの週刊版(軍隊用海外版)、②シカゴの半月毎版、③シカゴのアジア版隔週版、④ニューヨーク発行の月刊版、である。そこでさらに調べて三月二十七日号ということを書いて探して貰つたところ、国会図書館ではこの号は

欠号になっていた。そして東大やアメリカ文化センター(田)などにもファックスで調査、コピーの入手をお願いしたが、私の探し方が悪かつたせいかもしれないが、遂にどこでも見つけることはできなかった。・・・そんな話を末吉さんにお話ししたら、うちにもその手の雑誌はあるからと調べて下さり、旬日を経ずして『ライフ』誌一九五〇年三月二十七日号の当該記事のコピーまで頂いた。東京都写真美術館のライブラリーの実力はさすがであつた。

さて見つけて頂いた当該記事を基にしてこの不思議な、面白い話を紹介しよう。「なぜ、聖歌隊は遅れたか」という見出しである。「それは(一九五〇年)三月一日の夕方、(アメリカ)ネブラスカ州のビートリス町で起こつた。ウオルター・クレンペル師は、西部バプテスト教会の(聖歌隊の)合唱練習の準備のために教会に出かけた。彼は暖炉に点火した。(たいていの聖歌隊員は午後七時十五分に着くのが慣習になっている。そこは寒い所なのだ。-)そして食事に帰宅した。次、彼は妻と娘のマリン・ルースを連れて教会に戻つて来るべきだつた七時十分に、娘の服が汚れていたので、帰つてきてしまつた。彼女はクレンペル夫人が娘の別に服にアイロンを掛けるのを待ち、爆発が起つた時、家にいた。」

以下がすごい。他の十二人の人々は全員がそれぞれまったく別の理由ながら、いつもなら必ず集まっているべき時間に遅刻したのだ。高校生ラドナ・バンデグリーフトは数学の宿題を終らせようとして遅れた。(中略)旋盤工のハー

バート・キプフは大事な手紙を書いていたが、何故かうまく書けずにもたもたして遅れた。速記者のジョイス・ブラックはだるくてギリギリの時間まで暖かい部屋におり、まさに出かけようとした時、それは起こつた。(中略)ピアニストのマリリン・ポールは夕食後ちよつと眠り、母が七時十五分に起こしたのだが、間に合わなかつた。聖歌隊指揮者でピアノリストの母であるポール夫人は娘を起こし損ねて、遅れてしまつた。女子高校生ルシル・ジョウンズとドロシーは近所だし、いつも一緒に出かけていた。ルシルは七時から七時半までのラジオを聞いている慣習で、最後のところまで聞きたかつたのだ。ドロシーは彼女を待つていた。

七時二十五分、大爆発音がして、バプテスト教会は破壊した。壁は壊れ、重い木の屋根はつぶれた。だが上のそれぞれの理由で聖歌隊全員は遅刻し、無事だつたのだ。人々は、これは神の仕業だ、と考えている。(十五人全員が別々の理由で難を逃れる確率はおよそ一〇〇兆分の一と、数学者は計算している由)

ベトナムとの出会いと図書館

門倉 百合子

昨二〇〇七年十一月にベトナムへ行く機会があり、ハノイに一週間ほど滞在した。それまでベトナムのことはほとんど何も知らなかったもので、旅行の半年ほど前から歴史の本など何冊か読んでみた。すると意外にも昔から日本とのつながりがいくつもあることがわかってきた。

ベトナムは紀元前の漢の時代から千年に及ぶ中国の支配の後、九三九年に独立する。民族王朝の時代が続いた後、一八五八年からフランスの支配下に置かれ、一九四〇年から四五年には日本軍が進駐する。その後インドシナ戦争を経て一九五四年ジュネーブ休戦協定で南北に分断、そして一九七五年に北の軍勢力による南北統一の実現、という歴史を持っている。地理的に中国の南に隣接しており、中国の直接支配期

もその後も、中国文化の強い影響を受けていた。日本と同じく漢字を使っていたのもその現われである。現在のベトナムはローマ字表記のベトナム語を使っているが、それはフランスが持ち込んだもので、それ以前は漢字や漢字を応用したチュノムと呼ばれる文字が使われていた。現代の若いベトナム人は漢字を読めないが、寺院などの看板にはまだ多くの漢字が残っている。

民族王朝の時代の半ば、中国をモンゴルが支配していた一三世紀の元の時代、日本は二回の元寇を追い返しているが、同時期にベトナムは三回もの侵攻を跳ね返している。遠くヨーロッパまで領土を広げた元であるが、アジアでは日本とベトナムだけは侵略をまぬがれた。二〇世紀には、ベトナムだけはアメリカとの戦争にも打ち勝っている。(あの戦争はベトナムではアメリカ戦争と呼ばれていることも、いわれてみればもっともである。)

その二〇世紀初頭には、明治維新を成功させた日本に学ぼうと、何百人ものベトナム人が日本に留学している。また福澤諭吉の慶應義塾にならい、ハノイに東京義塾という私塾が作られ、近代化を目指す教育が実践された。しかしながらこれらの試みは、ベトナムの宗主国フランスや、そのフランスとの友好関係を維持したかった当時の日本政府により、発展を阻まれていた。

歴史の本だけでなく、その国の小説も読んでみよう、まずは国立国会図書館のNDL-OPACの件名に「ベトナム」「小説」と入れて検索したところ、何冊かヒットした。その中から『ディエンビエンフーの時計屋』という本

を、金沢の古書店から買うことができた。これは副題が北ベトナム小説集(一九四五―一九六四)という短編集で、日本人と結婚して来日したベトナム人女性を仲立ちに、複数の現代ベトナム人の作品を金沢エスペラント会が翻訳したものである。標題の小説の本身は、爆撃を逃れるための地下防空壕に開設された臨時時計店が舞台で、兵士たちの心情が実によく伝わってくる物語である。ディエンビエンフーは一九五四年ベトナムがフランス軍に勝った記念すべき地名であることも、よくわかった。

さて旅行に行くとその土地の図書館を訪れることにしているので、ベトナムの図書館についてもすこし調べてみた。今度は国立国会図書館の雑誌記事索引で、タイトルに「ベトナム」「図書館」と入れて検索すると、数件の記事がヒットした。その中の「ベトナムの図書館の概要」という『カレントアウェアネス』の最近の記事は全文が公開されており、すぐに読むことができた。それによるとベトナムの図書館は、その時々支配層の意向を反映した変遷をしていて、一九五四年以降は北ベトナムにはソ連の、南ベトナムにはアメリカのシステムが導入されていた。現在は多くの困難を抱えつつも、公共図書館、学術図書館、専門図書館などのシステムが徐々に整備されてきているとのことだった。

いよいよ出発の日となり、成田からベトナム航空の飛行機でハノイへ飛ぶ。五時間半ほどでハノイ郊外のノイバイ空港へ到着した。スケ

ジュールに一日空気があったので、すぐ現地の旅行社に図書館の見学をたのんでみた。するとなんと国立図書館 (National Library of Vietnam) と連絡をとってくれたので、指定の日時にハノイ中心部に位置する建物へ足を運んだ。前日の十一月二十五日には丁度創立九〇周年の記念行事が行われていて、フランスの植民地時代に建てられたという瀟灑な建物には、たくさんの花束が飾られていた。旅行社からの紹介状を示すと、国際交流の部署の職員の方が、英語で丁寧に案内をして下さった。

英語のパンフレットによると、一九一七年に仏領インドシナ政府の元に設立されたこの図書館は、当初インドシナ中央公共図書館 (Central Public Library of Indochina) と名づけられた。一九三五年には総督の名前をとってピエール・パスキエ図書館 (Pierre Pasquier Library) となり、一九四五年の独立後は国立図書館と改名された。初期のころは数千冊の蔵書であったが、現在は図書・雑誌・学位論文・マルチメディア等百二〇万冊のコレクションがある。

案内の女性職員の方によると、この国立図書館は研究者と学生に開放されているそうで、閲覧室にはたくさんの方が熱心に蔵書に見入っていた。蔵書には古い時代のももの含まれていて、漢字で記された書物もたくさん見ることができた。蔵書の保存のためには日本からも協力を得ているとのこと、たまたまその日に修復の仕事で日本から来られていた旧知のYさんと、書庫内で出会うことができたのは奇遇であ

った。

館内には昨日オープンしたばかりという、「韓国の部屋」というのがあった。そこは韓国企業の寄付で構築された韓国語の書籍・ヴィデオのコレクションが置かれていて、壁面のスクリーンには韓国映画も上映されていた。ハノイ市内にも韓国企業の看板はあちこちにあり、オートバイも韓国製のものがたくさん見受けられた。日本企業もいくつも進出しているが、図書館へ寄付したという話は聞かない。利用者には日本語も韓国語も人気があるそうで、分野も経済・技術関係の蔵書が多く使われているとのことだった。

図書館もハノイ自体も短時間の訪問であったが、初めてにもかかわらず、なぜかつかしい空気と時間の流れを感じることができた。多くのベトナム人は小柄で顔つきも日本人とあまり区別がつかない。米が主食であることも似ている。若い世代が多くものすごい勢いで経済発展しているのが、日本の高度経済成長年代を思いださせる。そういった感覚にまた触れてみた。今年もこの六月に再訪を果たしてしまっただけで、また別の機会にそれを記してみたい。

主な参考文献

- ・小倉貞夫『物語ヴェトナムの歴史』(中央公論社 一九九七) (中公新書)
- ・金沢エスベラント会婦人部共訳『ディエンビエンフーの時計屋』(金沢エスベラント会婦人部) 一九七五)
- ・Nguyen Hoa Binh『ベトナムの図書館の概要』(『カレントアウェアネス』290号 2006. 12. 20)



激動の10年間とLSFへの提案

京藤 松子

私が図書館サポートフォーラム（LSF）と最初に係わったのは、1997年にメンバー20数名がアメリカンセンター・レファレンス資料室へ見学に来られた時でした。50年近く続いた貸出図書館からレファレンス中心の資料室に変身して3年が経ち、新しく考案したEメール情報サービスやホームページでの検索システムなどを説明したことを覚えています。さすが図書館の第一線で活躍してこられたメンバーからは様々な鋭い質問やコメントが出て説明会は活発に終わりましたが、引き続きフォーラムの総会を開きたいとのことで私が席を外している間にいつの間にか私も幹事に指名されていたのです。半ば欠席裁判の形で私はLSFに加わったのですが、何かにつけ助言を仰ぎ指導してくださった先輩達の仲間に加えられたことは非常に光栄で嬉しく思いました。

ただ幹事としてはおろか会員として何ら積極的にLSFの活動に参加できなかったことを申し訳なく思っています。LSF設立後の10年間は図書館の現場が忙しすぎました。

新・旧世紀をはさんだこの時期は、周知の通り、図書館・情報界の激動期。現場ではITの導入に振り回され、利用者の情報入手形態も変

化し、図書館と図書館員は生き残れるか、というテーマが各図書館関係団体で真剣に討議された時期でした。活版印刷術以来の大革命といわれるデジタル革命にどのように対処するか、600年も続いた印刷資料とどのようにハイブリッド（混合）していくかを図書館員が悩んでいる間に、世の中にはeメールはおろかe出版、e銀行、eキャンパス、eラーニングとeを冠にした言葉が続出し、ついにはeライブラリアン、eユーザーという言葉まで出てきました。今でこそハイブリッド・ライブラリーやe云々という言葉には違和感もなく、当たり前のように使われていますが、当時はe化（電子化）された各界の状況を把握するだけでも大変。図書館の外にいるユーザーと図書館のコレクションに係わる出版・情報産業界の変化を追いながら、自館とライブラリアンとしての自分を変化させなければならない、まさにe化に取り巻かれた時期でした。

このような時期に一番助けになるのは共通の課題と目的を互いに話し合える職種団体です。私が係わった専門図書館協議会（JSLA）でも年次大会、研究会、セミナーなどを通して会員が直面している様々な問題、解決策、具体的

な経験を会員同士が分かち合う一方、海外のカウンタパートともコミュニケーションを図ろうと国際図書館大会参加と最新情報機関の視察ツアーを実施しました。1997年（米国シアトル市）の米国専門図書館協会（SLA）の第88回年次大会と2000年（英国ブライトン市）の国際専門図書館大会「Global2000」です。いずれの大会でも日本の専門図書館の現状を発表する「ジャパン・セッション」を設けて活発な意見の交換を出来、さらに欧米の22におよぶ情報機関の最新状況を視察しました。これらの活動は、図書館の生き残り^①を考えていたJSLAのメンバーに前向きで積極的な示唆を与え、その後の活動への大きな励みとなりました。

LSFは、末吉・井上両氏を中心としたJSLAの基盤と定着に貢献された方々によって設立されたと聞いています。この先輩達の多くは、図書館のコンピュータ化を完成させインターネットの台頭前後に退職・転職されたJSLA第一世代の方々です。第二世代はインターネットが最盛期の、謂わばホームページ、デジタル・ライブラリー、ナレッジ・マネージメントなどのeサービス^②に取組み、壁のない図書館^③を実現させ、図書館と図書館員の生き残り^④を真剣に考えたグループです。私はこの世代に入りますが、大半は私より数年若い団塊の世代の図書館員たちです。私は3年前に定年退職しましたが彼らもその人生の節目を迎えています。そして現在働いている人たちは第三世代。ネットの時代もほぼ定着し第一世

代、第二世代が築いた地盤の上に、更なるITの進歩を導入して新しいサービスを作り上げていく人たちです。ブログ発信、携帯デジタル図書、デジタル・アーカイブズなどなど。彼らはまた、運営母体の法人化、民営化、合併といった、古くて新しい問題を抱えて奮闘していると聞きます。また違った形の図書館が出現するかもしれません。

図書館は、しかし、人類が築いた最古の文化機関。クレイ・タブレットやパピルスの時代から延々数千年にわたって引き継がれてきたその過程では、図書館員は常にさまざまな問題にぶつかり、その解決に挑戦し、次代に引き継いできたことを思うと、20世紀中半から21世紀にかけてIT社会に挑んだ図書館員もその悠久の流れの一環を担っているに他ならないわけです。ただその一環が15世紀以来の情報大革命をもたらし変革の時代だとすると、我々は非常に責任のあるエキサイティングな時代を過ごしていることになります。

さて、このエキサイティングな時代に図書館・情報界に係わった(あるいは係わりつつある)人たちが、世代・年齢・職種を超えて知識と経験を分かち合い、未来に続く図書館をサポートして行こうとするLSFは、今後どのような活動を発展させたら良いのでしょうか。

LSFの名称が示すとおり「サポート」することが目的ですが、財団のように金銭面でのサポートは出来なく(元々そんな目的でLSFは設立されていない)、会員の知識と経験をもつ

てサポートするわけですから、会員の図書館・情報界の現状に関する知識をアップデートしておかなければなりません。そこで私がまず提案したいのは、会員の学習会・勉強会の強化です。大きなセミナー形式ではなく小規模な研究会という形で、現役の関係者を講師に招いて話を聞く会を年に3、4回もつことが必要だと思います。

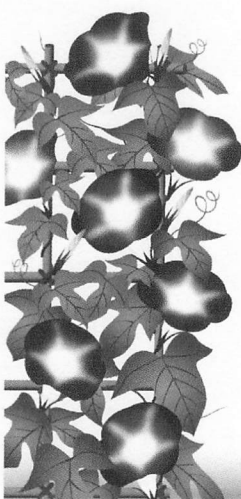
第二に提案したいのは会員同志の交流の拡大です。LSFの構成メンバーの大半は図書館のOB・OGで、図書館を離れて第二の人生をまったく新しい分野で楽しんでいる方が多くいます。井上如さんのように史跡・旧道ウォークに嵌まって何冊かの出版物を出された方、山内明子さんのように俳句を楽しみ句会の重鎮として活躍している方、古賀節子さんのように幕末維新の留学藩士だった大叔父君の軌跡を本にまとめられた方、末吉哲郎さんのように日本のアート・文化振興分野で第一線のフアントレイザーとして活躍しておられる方、他にも愉快で有意義な人生をおくっている会員が多々おられるはずです。このような方から面白い体験談を聞く会を増やしていければ会員同士の励みにもなり楽しいのではないのでしょうか。会員間の交流はとくに図書館や出版に関係しなくても良いと思います。図書館員はどんな分野に嵌まろうとも、興味を持った課題を徹底的に調べる職業病的宿命をもっていますので、どんな内容の話にも図書館の話題が付いてくると思っています。

この二つの提案は、LSFがこれまでに行ってきた表彰、見学会、セミナー、外部機関との

協力といった事業の上に加えたら如何と思った活動です。

私は、現役時代疲れきった身でLSFの懇親会に参加した時の印象を忘れることが出来ません。「エ！エ！ここに皆さんがおられるのだ！」と以前助言を仰いだ懐かしい先輩達の顔々を見てまるで温かい毛布に包まれたような気分になりました。疲れが吹っ飛んでしまいました。まるでオアシスに來たような気分でした。

LSFは、仕事で疲れた後輩達が気軽に先輩達に会える温かいオアシスの場所であり続けて欲しいとも願っています。



21世紀の学びと学校図書館

古賀 節子

私が関わってきた仕事は、主として図書館員養成と学校図書館関係だったので、その中でも学校図書館分野で最も関心が強かったことと、図書館サポーターフォーラム発足以降約10年間の教育界と学校図書館界の主な動向について、本記念号で紹介したいと思う。

これまで学校で行われている四角い教室で黒板を背にした先生と生徒が向き合って一冊の教科書で学ぶ方法は、産業革命発祥の地、英国で、それまで農耕作業に従事していた人びとを効率よく教育して一度に大量に工場での働き手を生み出すために考案された方法で、以降、これが世界の学校教育現場の主流を占めるようになった。

近代化を命題とした日本政府も、この方法を明治の学制制定と同時に取り入れ、明治・大正・昭和・平成の今日にいたるまで、その状況は余り大きくは変化していない。しかし、考えてみると、このような18世紀に考案された当時の社会状況に適応した人材育成の学習方法が、人類がこれまで経験したことのない情報社会が到来している昨今、適切な方法ではないことは、容易に理解できることだ。そこでは、基礎基本を学ぶことに変わりはないが、予測不可能

な将来を切り拓く知識や能力・技能の習得が必要になっている。

このような時代の流れの中で、教育と学習との関連から学校という義務教育機関の中にある図書館について考えてみると、学校図書館法が1953年に施行されてから今日に至るまで、学校図書館は、教科書と教師の主導による学び方ではない、今日求められる学びの視点にたつて、子どもが教えられるのではなく、自分で学ぶのに必要な知識・技能の習得方法について、これを研究課題として研究を重ね実践もしてきている。

それは、一言でいうと利用指導と呼ばれて、子どもに図書館の使い方、メディアの種類・特徴・利用方法、探し方などを教え、そのための教科書も作成され、時間割の中にその為の時間を設けて指導してきた学校もあり、学校図書館関係者の間では、重要な役割として認識されてきている。しかし、日常的に学ぶ国語・算数・理科などの教科学習とは離れて別個に、図書館の機能や読書や学習に必要なメディアについて学ぶ方法をとってきたことは、学習者が学習内容を理解し知識として日常生活に役立たせるには賢明な方法とは言えなかったし、教師の側には

も自分で学ぶ力の育成に対する認識が薄かったこともあって、残念なことに、教育現場全体には普及したとは言えない状況にある。それでも、1983年に文部省（現在文部科学省）編纂の「小学校、中学校における学校図書館の利用と指導」の中では、課題解決の過程にそつたメディアの利用方法が説かれた。しかし、当時は大きな力にはなり得なかった。

その後、情報社会の進展に伴って、1997年「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」中央教育審議会第2次答申が発表され、学校教育は国際化・情報化に対応する方向へ向かい、科学技術の発展などの視点から、個性的な人材や創造的な人材を育成することが最重要課題として認識され、「ゆとり」の中で自ら学び、自ら考える力など、個人が主体的・自立的に行動するための基本となる資質や能力を大切な柱とする「生きる力」を育む教育への推進が説かれ始めた。その実現にむけて、1999年には学習指導要領が改訂され、「ゆとり」の中で「生きる力」を育むために、教科を横断した知識・技術を生かして学習できる「総合的な学習の時間」が新設され、中学校では技術・家庭科で情報とコンピュータが必修になり、高等学校には新たに「情報科」が設置された。

更に情報化の進展に対応した教育環境の整備にむけて、学校図書館には情報センター・学習情報センター・地域の情報通信ネットワークの拠点としての機能が求められ、司書教諭のメディア専門職としての役割の充実ということから、1999年学校図書館司書教諭講習規定が

改正され、2003年以降は12学級以下を除いて、必ず司書教諭を置くことに改められ、司書教諭講習科目も5科目10単位に改定された。なお、学校図書館所蔵各種メディアの余りにも貧弱な現状を改善するため、1993年度から、学校図書館図書整備5カ年計画で500億が計上され、以降単年度で約100億が地方交付税がとして交付され、2002年には、650億が図書整備5カ年計画で、地方交付税として計上され2007年には更に5カ年計画が始められた。

これらの措置は、1995年に提出された「児童生徒の読書に関する調査研究協議会報告書」を基に、学校図書館所蔵メディアの充実は勿論だが、子どもの読書への関心が高まったことにあった。2000年は「子ども読書年」とされ、2001年には「国際子ども図書館設立推進議員連盟」が発足し、これが2002年「子どもの読書活動の推進に関する法律」を制定させ、2005年には「文字・活字文化振興法」の制定へと発展した。2006年には教育基本法が改正され、学校教育法・学習指導要領・教育職員免許法・社会教育法・図書館法・博物館法・生涯学習関連法など、法体系の内容の見直しや改正が行われる見通しになった。

このような動きの中で、今、問われていることは、学ぶ方法を情報社会に適した姿に変えることで、それは、課題を、あるいは分からないことを、自分で解決できる知識と技能を習得できるような学びの方法に転換していくことだ。そのような課題を解決する過程は、あらゆる分

野で課題の難易にかかわらず、次の6つの過程を踏むと考えられる。即ち、①課題の設定 ②情報探索の筋道をたてる ③情報源を見つける ④情報を利用する ⑤情報をまとめる ⑥評価する、の6過程だ。これは、レポート作成にも、報告書作成にも、博士論文作成でも、各過程の表現は多少異なるかも知れないが、総てこのような過程を経て行われる。総合学習の時間は、まさにこのような情報リテラシーとも言える知識と技能を育成する時間であって、習得した知識・技能を日常生活の中で生かしていくことに繋がっていく新たな創造活動を提起する可能性を含んだ学びの場といえる。

このような学び方の必要性は次第に認識されてきているが、まだ総ての学校で実践するには、教師や父兄の理解、ひいては社会的な理解が乏しいと思う。ここで、学校図書館関係者は、学校図書館がこれまで目指してきた利用指導の内容は、今、まさに情報社会を生きるのに必要な知識・技能を育成する基本であることを確信し、教科教師と協働して子どもの健全な成長を支援していくために、研究と実践を重ねていくことだと思う。

「文字・活字振興法」の理念は、読むこと書くことを中心とする精神的活動や出版活動、文化創作活動の環境整備と教育課程での言語力育成についての配慮を基本理念としているけれども、こどもの自由な読書活動を、大人が選んだ本だけ読めば良いと言ったような狭い解釈に陥ることを強く戒め、何にもまして、豊富な読書材が子どもの手の届くところにあって、自由に

読める環境作りを支援することへの配慮が肝要だと思う。



仕事場としての図書館

坂本 義実

ちょうど2年前、36年勤めた財団を退職した。しかしまだ稼ぐ必要があり、仕事も翻訳や原稿などがそこそこあった。さてどこで仕事をするかである。もちろん自宅できないことはない。だが専用の書斎があるわけでもなく、それに今までほとんど家にいなかった男が一日中うろちよろしているのは家人にとつては堪らないだろう。おまけにヘビースモーカーだ。筆者も家に閉じこもるのは本意ではない。

ワンルームの仕事場でも借りられればいうことはないが、そこまで稼ぎはない。レンタルオフィスやいま流行りの「有料自習室」も便利のところは高い。そこで当然頭に浮ぶのは図書館である。筆者も退職前はさる財団併設の専門図書館にいたので、その辺りの感覚はわかる。

まず地域の公共図書館に当たってみたが、目的が違うので使えない。パソコン用の電源席も少ないし、席も資料を広げるほどのスペースはない。その後いくつかの館を回った結果、3カ月くらい経つと4館に絞られた。図書館関係者なら読後にすぐ分かれると思うが、仮にA、B、C、Dとしておく。

仕事場としての利用は初めてだが、蔵書、レファレンス、貸し出しなど通常の図書館評価の

要件はほとんど無関係で、元図書館屋としては「邪道」の使い方だと思う。だが今後団塊世代の引退とともにこういう使い方をする人が増えてくると思い、4館（いずれも都心部の大規模図書館）の「仕事場としての図書館」の使い勝手を比較してみた。

（1）地の利・猛暑、厳寒、嵐の日などは自宅でやるが、普段はいささか重いノートパソコンを抱えて行くので、駅から近い方がありがたい。その点4館とも最寄り駅から10分以内で便利である。A、B、Dは最寄り駅が複数ある。自宅からの「通勤時間」は1時間弱でまずまず。評価は、B、A、C/D（同率）の順。

（2）開館日・開館時間・時間的にフリーになり、土日に関係なく長時間滞在するので開館日と時間は重要だ。休館日が最も少ないのはCで、月に日曜1回だけ。昨年は大晦日まで開いていた。Bは日曜1回、平日1回休館。Dは日曜・祝日と平日1回、Aは土日・祝日と平日1日休館。開館時間もCとBが長く、Cは平日は朝10時から夜10時まで、Bは夜8時まで開いている。逆にAは9時〜17時のサラリーマン標準時間、Dは平日9時半〜19時、土曜は17時ま

で。評価は、C、B、D、Aの順。

（3）環境・設備・館周辺の環境はBとDが特に良い。館内は、A、C、Dはカーペット敷で、設備も新しく、空調も快調だが、Bは建物が古いせいもあってPタイル敷。しかも冬寒く、夏暑い。真冬などは手が冷たくなる。とはいえ一階の館員の方々は外気の直接入るところで仕事をしているので贅沢は言えない。A、D、C、Bの順。

（4）閲覧席・仕事机となる閲覧席は、Aが最も広く、4人掛けの大きなテーブルを1人か2人で使える。キャレル席も数十ある。Bはやや狭い4人掛けテーブルで、特に電源席は混んでくると4人が使用することになり、その時はやや窮屈。Dは横並びの席で若干狭い。最も狭いのはC、3人掛け、仕切付きで、パソコン、マウスパッドを置くと、A4版の雑誌を広げられない。もう少し広いキャレル席があるが、2時間の制限付き。評価は、A、B、D、C。

（5）電源とネット接続・設備で最大の問題となるのは電源席の有無であるが、4館とも充分にある。次にインターネット接続で、筆者のような仕事ではこれも不可欠だ。この点、Cは各席に有線LANのジャックを装備し、LANケーブルも無料貸し出した。BはWiFi無線LANが使える。問題は1階では使えるが、3階の雑誌室に行くとき繋がらないこと。AはBの6階にあり、公衆無線LANはほぼ繋がらない。Dは周囲の環境のため全く繋がらない。メインの「仕事場」であるAでネットが使えないのは実に痛く、WiFimaxなど次世代無線網

の運用開始を待望しているが、残念ながらもまだ当分先のことになりそうだ。C、B、A、Dの順。

(6) 資料・蔵書を使わないといっても海外雑誌を中心に十数誌を使う。最も充実しているのはAで、しかも開架式で自由に使える。Bは基本的なビジネス誌はあるが、3階の雑誌室から持ち出せず、前述のように3階はネットが使えない。ただし入荷が早く、基本的に書店と同時に入るので、1日も早い利用が必要な筆者にはありがたい。Dは全開架式で最新号は使えず、Cも海外誌はほとんどない。評価は、A、B、C/D。

(7) 複写・AとBは自己複写と係員複写、Cは自己複写のみ、Dは係員複写のみ。モノクロコピーは自己複写でだいたい1枚10円だが、カラーコピーはAとCが80円、Bが130円、Dは210円と随分差がある。Aは、入館カードとバーコードを使った手続きに最初はちよつと戸惑う。Dの依頼複写は病院の薬・会計待ちを思わせる。最も簡便なのはC。評価は、C、A、B、Dの順。

(8) 利用者・長時間仕事をするので、周囲にいる利用者に気になる。Aは専門図書館なので、はっきりした目的で来る利用者がほとんど。資料やレファレンスの利用も活発だ。用件が終わるとビジネスライクに帰ってしまうが、筆者のような長時間利用の常連も数人いる。Dはもう少しディープな調査研究を目的にした利用者で、滞在時間も長い。たまに漫画雑誌のバックナンバーを積み上げて読んでいる人もい

る。Cは昼間の利用者はほとんど学生のもので、参考書を持ち込んで長時間勉強している。このため朝10時前に並んで長時間勉強していることがある。夜はビジネスマンもいる。最もバラエティに富んでいるのは公共図書館のBだ。長時間利用者も多いが、仕事よりも資格取得の勉強が多いようだ。学生はあまりいない。長時間滞在者には時間つぶしの高齢者やセミ・ホームレスらしき常連も多い。ぶつぶつと独り言を言う変な人や利用者同士のかいも結構見かける。なかなか面白い。評価は、A、D、C、B。

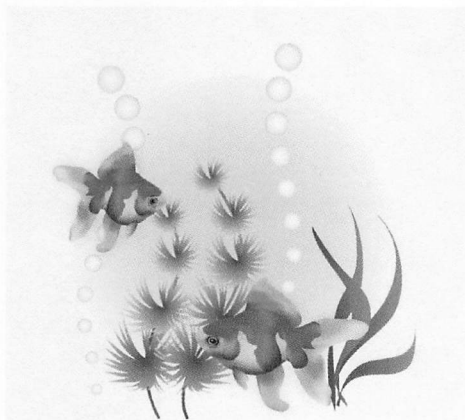
以上のような評価で、現在は週に1日か2日は自宅で仕事、外に出る時は、10時から5時前までAで仕事をし、その後運動のため20分ほど離れたBまで歩き、夜8時頃までインターネットを使うというパターンが定着してきた。Cは日曜でBが休館の時に利用し、Dは特別な調べものがある時に出向く。

前述したように、このような図書館の使い方は「邪道」であり、図書館側、特にAでどう思われているかは若干気になる。しかし丸2年間の経験では、図書館は筆者のような仕事では仕事場として充分使える。多少の不便はあるが事務所や仕事場は必要ない。しかもタダだ。また家に引きこもらず、都心に頻繁に出向くのは刺激にもなる。図書館をこんな形で利用したのは実は初めてなのだが、いろいろ面白い発見がある。現役時代に経験すべきだった。ただこうした便利な施設が複数使えるのは東京など大都市

圏だけだろう。

最後に番外。長時間滞在するので、食事もある。最後のひとつだ。この点では、親機関の食堂を利用するCが、バラエティ、値段、味、眺望とも最も充実している。6時からアルコールも飲める。ただし土日は食堂が休みで悲惨。評価は、C、D、A、Bの順。

もうひとつ番外。筆者は特に都会では絶滅種に近づいた愛煙家で、文章に詰まるとつい煙草に手が出る。だからほとんど全面禁煙のレンタルオフィスなどは初めから対象外になるが、幸い4館とも喫煙室がある。最も明るく大きいのはDで、30人くらいは入れそうだ。テーブル席まである。Cの喫煙室は階も違って、ちよつと遠い。D、A、B、Cの順。



図書館ネットワークの今昔

末吉 哲郎

経済団体連合会に勤めていたせいか「団体」への関心は人一倍強い。昭和三十二年に経団連図書館（当時、調査部資料室）に勤務してから図書館生活は約三十年に及んだが、図書館の世界は資料の入手や共同事業を通して相互協力には欠かせず、ネットワークや図書館団体は仕事の上で欠かせないことであつたので、尚更に関心は高かつた。

以下に立上げに関与した図書館団体の事例を自分史的にとりあげてみたい。

情報資料研究会（JSK）

1961～1971

専図協の結成（1952）には経団連も発起人団体の一つとして加わつたこともあり、当初から行事には参加した。しかし委員長クラスは年配者が多く近寄り難かつたこともあり、当時日本生産性本部図書室にいた前園主計氏と相談して若手の勉強会を立ち上げることにした。主な専門図書館に声をかけて総勢十五名（二十歳台後半）が集まり、昭和三十六年（一九六二）八月に第一回の研究会を経団連会議室で開催し発足した。参加は、各機関一名、役職者でない

若手を有資格者とする、特定の学校出身に片寄らないなどを条件とした。月一回のペースで、会員持ち回りで仕事に関連した勉強の成果を発表しあつたが、毎月顔を合わせては専門図書館の取り組むべき課題、ドキュメンテーションの手法、海外事情等について大変な勉強をした。メンバーには前園氏や小生の他、飯田賢一（新日鉄）、井上如（野村総研）、河島正光（機会振興協会）、太田泰弘（味の素）、国分信（開銀）、萩昌朗（NHK）の各氏などであつた。一九七一年には井上如氏の手により「情報資料研究会10年の歩み」が編纂されたが、変わり者集団のインビジブル・カレッジとまえて紹介。例会約100回分の発表者、発表テーマが克明に記されている他、会員の著作、外部発表などが表出されている。この会が主導して専図協経済ドキュメンテーション研究集会が一九六五年に発足するのだが、箱根等に泊まりがけで仲間と語り合い、知己を得たのは良い収穫であつた。

大手町資料室連絡会 1968～

経団連が東京・大手町に新館を建設し、公開図書館を開設したのを期に、一九六八年ビジネ

ス街の大手町近隣の専門図書館に呼びかけて地域ネットワークということで連絡会が発足した。日本経済研究センター、鉄鋼連盟、開発銀行、農林中金などの図書室十五機関の相互協力が活動の中心であつたが、資料の相互貸借の他、各種ディレクトリや雑誌の所在目録を共同で作成したり、雑誌類の保存分担やスタッフマニユアルの共同編集など実務とレファレンス業務のレベルアップをはかる上で大いに役に立つた。

専門図書館の地域的な協力事例として各方面から注目されたが、新聞で「企業隣組」としてその活動が取り上げられ、大きく報道されたりもした。現在でもこの連絡会は健在で活動を続けている。

経済文献研究会（経文研）

1979～1999

雑誌記事索引は国会図書館作成の網羅的なものや経済資料協議会の経済学文献季報などがあつたが、採録対象が網羅的過ぎたり、学会誌中心であつたりした。

そこで実務的観点からのビジネス関係誌中心の雑誌記事の索引誌を新たに立ち上げようというこで、野村総研、エネルギー経済研、銀行協会、機械振興協会、日経連など十五機関の共同作業により制作することにした。

採録のビジネス誌1,000種の雑誌記事、月約5,500件を雑誌別に参加機関が分担し、書誌データを編集センターである日外アソシエーツに送付することにして共同編集作業は

開始された。索引誌はJOINT (Journal of Industrial Titles) 雑誌記事索引／経済・産業編の誌名で月刊刊行された。

一九八一年からは日本経済新聞社の協力を得てオンライン・データベース化された。わが国初の図書館間相互協力によるデータベースと喧伝された。一九八五年には国会議員の情報産業振興議員連盟のヒアリングに出席要請があり、JOINTを中心に報告を行なった。また創刊五周年記念として宣伝をかねて各大学司書過程對抗テニストーナメントを一九八四年に青山学院大のテニスコートで開催するなどしている。

企業史料協議会 1981

創立は一九八一年十一月、各企業の社史、企業博物館部門、専門図書館、経営史関係研究者を包含して企業の史料の保存活用はいかにあるべきかを協議する場として設立。経団連会館で創立総会を開催し、初代会長に経団連・花村事務総長を選出、事務局を日本経営史研究所に委嘱した。会の英文名称はBusiness Archives Associationでアーカイブを冠した団体のはしりであった。

各企業の社史編纂室を社史刊行時の臨時的なものにせず、企業の史料保存活用組織として常設する、モノ資料もアーカイブの対象として企業博物館を盛んにするなどテーマとしてセミナーを開催したり、見学会を全国的に行ったりしてきている。またこの方面の専門家養成のため、講座を法政大学との共同で開設した。

1988年には大阪の民博で、大阪工業会と

共催「企業と博物館を考える公開シンポジウム」を、1991年には創立10周年記念「企業文化を考える」シンポジウムを経団連会館で開催した。

国際交流事業として、海外視察調査団を、一九八三年にヨーロッパ各国、一九八九年にアメリカ、そして一九九二年に中国へ派遣している。また中国档案館との間に協定を結び、隔年交互に訪問団を派遣してきている。

図書館サポートフォーラム 1996

小生の新国立劇場常務理事就任を祝って、図書館関係者七〇名に市ヶ谷私学会館で囲む会を開いていただいたが、お話をいただいた時、一個人の職場異動のために大勢かけつけていた多くののは恐縮だからと固辞したが、どうしてもいうことで図書館出身者の会発足を条件に開催してもらった。これが図書館サポートフォーラムの発足となっており、用意した設立案を席上承認してもらった。一九九六年七月十五日付の設立案は、趣旨として「各種図書館の充実発展を図書館出身者の立場から支援すると共に、相互の連携をはかる」とし、活動内容として、ユニークで社会的に意義のある各種図書館活動の表彰および社会的広報や見学会、現職者との交流をあげている。言い出しつべとして代表幹事を一〇年も続けさせてもらったが、日外アソシエーツの事務局としての積極的なサポートにより、表彰事業をはじめ、各種見学会や懇談会が継続して行われていることに感謝している。

この他に、一九七七年に設立された日本索引家協会があった。書誌や索引は図書館の大事な道具であり出版活動上も不可欠の存在であるにも拘わらず、世間からはあまり重要視されていない。また書誌索引は著作権上もその作者は必ずしも保護されていないということで発足し、季刊「書誌索引展望」を刊行するなど、その重要性和索引の向上を訴えて、英・米につぐ世界で三番目のIndexer's Associationであったが、解散したのは残念なことであった。

美図連（美人図書館連盟）やゴ図連（ゴルフ連盟）などの設立にも関係し、小生は専務理事を務めたが、これらの会は現在も続いているのかどうか判然としない。

最近の図書館ネットワークはパソコン・ネットワーク、横断検索で他機関の蔵書も瞬時に検索、用件や役員会のやりとりまで顔をみなくても用が足りる。これに対し昔のヒト・ネットワークは時間と手間はかかるが顔の見えるネットワークで親密感があり永續する。さてこれからどうなるか。

ト・テ・シャン談話

——もう一つの私の十年史——

平井 紀子

カチン！カチン！と澄んだ杵が入り、おもむろに緞帳が上がる。三味線をかまえ、頭を軽く下げ、右手を床について待っていた。その時がきた。——急にまばゆいライトが頭上から照らし、客席が薄暗くぼおーと見える。三味線本

手の私は中央、左右に三味線替手と唄方が座する。今日の演目は「三番叟」。「三番叟」は狂言「翁」をもとにしたおめでたい曲で、小唄では五分ほどに短く編曲したものであるが、普通の小唄より長く難しい。私のようなこの世界に浅い者が、弾く曲ではない。

本手の私は（ハア）と低い声で始まりの合図を入れ、演奏が始まった。

とうとうたたり、たたりらん

所千代まで萬代の鶴と亀との嶋台に
常世むすぶの式三献

おさえおさえ悦びありや

我が子のところより

ほかへはやらじと思ふ

能楽のような低い延びのある節回しで前半までは、まあまあ順調に進んだ。

ここから次への唄の合間は三弦二丁のかけあい、三味線の聴かせどころである。

トテシャン・トテシャンと数回続き、そのあと複雑な手が続く。それは何回くり返すと回数で覚えるのではなく、音感の世界である。一年以上も練習している、頭も指でも覚え、めったに間違ふことはなかった。だが、どうしたのであるうか。ふうーと分からなくなり、頭が真っ白になった。自然に動くはずの指がどのポジションを押せばよいのか分からなくなってしまった。どうしよう。もともと何となく好きになれなかった曲であったが、案の定、三味線のかけあいの時、変だな？ 普段と違うということとは、はつきりわかった。ここで私が三味線を中止したら、幕は下り、もうザ・エンド。私だけの失敗ではなく、師匠や家元にも迷惑をかける。とつさに、くそ度胸！、ちよっとおかしなポーズだったが、唄方の師匠と替え手を交互に見て、もう一度トテシャンを繰り返した。唄方師匠は、三味線を無視し、次の歌詞を唄いはじめた。そのあいだの記憶はない。

何とか途中から手が動き、弾き終えたのであ

ろう。我にかえったときは、幕は降りパラパラと客席からの拍手が聞こえた。

こんな経験ははじめてだった。「誰もそんなによく見てないよ、聴いてないよ」、と自分を慰めて、楽屋に戻り一息ついた時だった。その時、「あなた、すごいわね。よく続けられたわね。」と、背後から品のよい身知らぬ師匠から声を掛けられた。顔はほてり、何と返事してよいかわからず、苦笑いでお釈した。

三味線を始めて、もう二〇年ほどになる。仕事の合間での稽古で、真面目に通い練習しはじめて約十年、三味線は私の十年史でもある。仕事も趣味も一人前になるには十年はかかる。忍耐と継続に尽きるが、その先にわずかも灯りが見えるからであらう。

「また、どうしてあなたが三味線なの？」とよく訊かれる。どちらかといえば音痴ぎみであつたから、そう言われるのも当然である。強いて云うならば、仕事からの開放感と逃避からであらうか。語学力もないのに、欧文献と毎日格闘していた。服飾を専門とする大学図書館で、ほとんど毎日洋書とにらめっこしていた。幸いにも服飾分野には優れたビブリオグラフィがあり、バイブルのようにメモを書き込み、擦り切れる程利用していた。退職する時、汚してしまったという理由で同書を新品で返し、メモ入りは私の宝物の一つとして今も大切に利用している。

仕事とは逆に、歌舞伎・文楽が好きで、観るだけでなく、いつか八和事Vをやりたいと思っ

ていた。ミニ版であるが、小唄の稽古場が職場に近い新宿歌舞伎町にあるので通うことにした。四十歳を過ぎてからの手習いは遅すぎることはわかってはいたが、むしろ違う世界に浸りたかった。

小唄は江戸小唄と新内小唄をやっている。三味線を弾くには唄も覚えなくては弾けない。唄は苦手であるが仕方ない。まったくの初歩から三味線の持ち方、指の動かし方から始まった。三味線には撥を使うのと爪弾きがあるが、私は身体に比例して手も小さく指も短く撥には向いていなかった。爪弾きは、実際は爪ではなく、右ひとさし指の爪と爪の先端の肉、爪腹で弾く。ト・テ・チャンとかチン・トン・シャンは、口（くち）三味線といって、メロディを覚えるときの口調である。はじめは糸をはじいても三味線の皮にうまく当たらず、二の糸がきれいな音色が出るまでに随分時間がかかった。それでも退職一年前に師範試験を受け、師範免許をとった。といえば、さぞかし上達したと思うであろうが、この世界の組織はピラミッド型、上納金制度で昔からの組織が成り立っており、ある程度の年月をこなすと、そこそこで取得できるようなものである。

小唄の師匠のなかには、かつては柳橋、新橋の芸者で、八十歳以上の粋なおばあさんが多い。こじんまりとしているが、背筋がピンと伸びて、口紅をくつきり塗り、威厳があり、そのくせ女性の私でも色香を感じる。さぞかし昔は

多くの男性の目を惹いたことであろう。顔の細かい皺には幾多の恋と苦難が刻まれているに違いない。

十年前は、洋は洋でも座右には洋書であったが、いまはもっぱら洋酒である。

シングルモルト（ウイスキー）をロックにしてチビリチビリやりながら、三味線を弾き、相変わらずの自己流の小唄を口ずさむのは、何とも心地良い。ちょうど一曲終わる頃には、よい飲みごろになっている。

もう十年こんな人生でありたい。あの声をかけてくれた師匠のようなおばあさんになりたい。



図書館の風景と図書館の写真のこと

— 一〇年前のアムステルダム朝から

水谷長志

以前、専ら協関東のニューズレターに次のような一文を書いたことがある。

「鉛筆やゼムクリップを扱って卓抜な文化史論を書いてきた、H. ペトロスキの翻訳『本棚の歴史』が、ようやく出た。『私たちが日常生活で明けても暮れても目にしているものが、本当のところどれだけ見えているかは疑問だ。実際、私の場合、本を見ても本棚は見えない』と著者が書くように、図書館員も本棚そのものを見ていないことは多い。本棚に限らず、図書館のいろいろな用品に気がつかって、お金も必要だが、使いやすく見た目すっきりきれいな「図書館の風景」を開くことが、いささか苦手のようだ」(1)、と。

二〇〇二年と二〇〇七年に東京国立近代美術館と国立新美術館のアートライブラリの開室に携わって、我が身の「苦心」と「苦手」をふり返りつつ書いた記憶がある。前者の場合、一九九七年から本館増改築の構想が立ち上がり、いままでスタッフユース・オンリーの書棚から国立美術館としては初めての公開アートライブラリの付設を含んだ増改築工事だった。

当時既に東京都現代美術館、横浜美術館、愛知芸術文化センターなどに優れた公開のアート

ライブラリはあったが、その後追いで国立美術館がアートライブラリを作るとしたら何がポイントになるか、さんざ考えたものの三〇〇㎡足らずの空間に盛り込むべき新たに意味ある機能が何であるのか、既に一〇万の数が見えつつあった蔵書量の収納とのバランスに足を取られてばかりで、明確なビジョンなどないままに走り出した。

一九九〇年、当時アメリカン・センターにおられた京藤さんの導きによりUSIA—IVPの招きでおよそ一ヶ月、アメリカの美術図書館を見て回る幸運もあったし、増改築の真最中の二〇〇〇年の秋、ボストンからヨーロッパ数ヶ国へ在外研修に出た折は、異なる国の図書館にふれる機会を得て、新しいアートライブラリのデザインと機能の足しにしようとのめりになりながら駆け回った。

それらの経験も貴重だったが、まだ机上のプランで増改築についてあれこれ議論に議論を重ねていた一九九八年八月、IFLAアムステルダム大会に参加し、その後、ベネルクスから北欧へ足をのびして訪れたアートライブラリと対面した体験が、これからの展開を模索しつつあった身には、一層切実で響くものが強かつ

た。

アムステルダム大会での美術図書館分科会のテーマは、「Bridging Cultures」で、前々から興味のある江戸後期日本における洋風表現の導入を日蘭文化交渉史の一駒として「Dutch influence on the reception and development of western-style expression in early modern Japan」と題しペーパーを発表した。実のところは、このペーパー発表を表向きの理由としてIFLA参加を美術館に願ひ出て、さらに大会後、加えて新ライブラリのための視察出張をかなえる目論見でエントリリーしたのだった。

どこを見るべきかの目算はあった。偶然、送られてきたアントワープ現代美術館(MUHKA: Museum van Hedendaagse Kunst Antwerpen)のライブラリのパフレットに載った数葉の写真が、想像上の新ライブラリの規模と佇まいに極めて近く感じられていた。アムステルダム中央駅からTEEで向かったアントワープでは、プランタン印刷博物館の見学も楽しい記憶に残っているが、まずはMUHKAに向かい、首尾良くそのライブラリアンと面談して当初の目的はかなった。什器などは東京で見た写真のままのライブラリであったが、まもなく書架は満杯という様子だった。後々の東京国立近代美術館のアートライブラリの行く末を既にして暗示させていたことをいま思い起こしている。

その後、ストックホルム、ヘルシンキ(特に同地のKIASMA現代美術館のライブラリがMUHKA同様シンパシーを持たせる趣があった)を見た体験は、後の在外研修での体験とあ

わせて新設の二つの東京のアートライブラリの風景に活かされ、記憶されていたように思っている。

さて、「図書館の風景」に話を戻そう。図書館を見ること。利用者や職員といった人々とともに建築、インテリアそして書架をはじめとしてさまざまな図書館用品、ラベルなど紙用品から端末にいたるまで、その細部を見て回ることにはさまざまな発見につながるし、なによりも楽しい。写真に撮りたい欲求に駆られるが、利用者を含んではいけないとかシャッター音が大きいのは気が引けるとかで、行った図書館の数の割には手許に残った写真は少ない。そんな思いがあったところに最近、国立国会図書館のカルレントアウェアネスから次の報告が入ってきた。「ある日の図書館の様子を写真でアーカイブ(米国) 全米図書館週間内の二〇〇八年四月一六日、図書館の様子を写真に撮影し、一館当たり最大一〇枚を写真共有サイト「Flickr」の特定コレクションにアップロードしてアーカイブするプロジェクト「A Day in the Life of Iowa Libraries」の第一回が開催」。

実は「Flickr.com」に「図書館の風景」を築くのは美術図書館の世界ですでに始まっていた。北米の美術図書館協会ARLIS/NAのメーリングリストからニューヨークのメトロポリタン美術館の有名なトマス・J・ワトソン・ライブラリとアムステルダム中央駅国立美術館のライブラリが紹介されていた。アート・ドキュメンテーション学会の美術館図書室SIGが参加するメーリングリストにこの情報を投げたところ

大変、好評だった。

その一葉をライブラリ・スタッフのグループから紹介しよう(図1)。「Often enough library assistants get crushed..」というようなコメントが全点について、にやり、大笑い、なるほど、さすが、うーん、などなどいろいろな感想を漏らしながらついつい次々とめくって、時間が過ぎる。

重ねて実は、図書館の風景と図書館の写真については、かつて拙著の後書きでも触れたことがある(2)。日本の図書館の正史、例えば、JLAの『近代日本図書館の歩み』に図書館の写真の不在を嘆く思いをAndre KerteszのOn Reading. (Penguin Books, 一九八二)などの紹介に仮託して述べた。

図書館員が自らの図書館の風景を発見し、それを記録しながら、そこに立ち現れる佇まいをときに微笑しながら、見直していく、そんなことの必要を強く思うのは、確かに、かつて現場に立つて見ることから感じたこと、考えたことこそが、新しいアートライブラリの立ち上げにもっとも大きな原動力になった、その体験からきているようなのだ。

私にとつてのこの一〇年は、一九九八年、アムステルダムのホテル・クラスナボルスキーから中央駅へと一人向かったあの夏の朝から始まっていたのかもしれない。

1) 「『本棚の歴史』から図書館博物館をおもう」『Newsletter せんときよう・かんとう』No.182, 2004.5. p. 1.

2) 「あながき」『図書館文化史』2003.5, 勉誠出版, p.130.

蛇足: アムステルダム中央駅と「Flickr」に写真を寄せるライブラリのある国立美術館(レンブラント〈夜警〉、フェルメール〈ミルクメイド〉などで著名)とは同じ建築家カイペルスによって設計された。辰野金吾の設計による東京駅丸の内口はこの中央駅をモデルにしたとするのは、俗説とのこと。http://ja.wikipedia.org/参照。

図1 Rijksmuseum[Amsterdam] Research Library's photo stream から



http://www.flickr.com/photos/rijksmuseumresearchlibrary/1467874785/sizes/o/in/set-72157602457033650/

にわとりと卵

三浦 邦雄

最近の後期高齢者保険制度の問題はわが国が抱えてしまった財政赤字が引き起こしたツケであり、医療や福祉もこれ以上わが国がアメリカナイズされるのであろうかと思うといったまれない気が強いですし、前期高齢者である私も他人事ではない切実な問題です。以上はさておき、人生万事塞翁が馬で、あるメーカー企業の図書室に短い期間ではありましたがまわされ籍を置いた者として、メーカーで一生を過ごしたこととともに図書館や本は私の本籍のような気がしていますし、その一環としていろいろな縁でこうして図書館サポートフォーラムに加えていただいていることを感謝しております。

終戦を小学校2年か3年で迎えました。20年3月17日の東京大空襲を経験したことははっきり記憶に残っています。小石川植物園に逃げその時父と離れ離れになったことやB29から雨のように降ってくる焼夷弾と僅かな日本軍の高射砲の弾煙を忘れられませんが、小石川にあった我が家に戻った時とても多かったと思う父の蔵書がいたところでブスブス燃え焦っていたことは忘れられません。今、私はそれまでの幼年期では本に親しんでいたことも思い出しま

す。太平記の楠正成の話や、源平の合戦や義経の話などはつきり覚えています。それが現在地元鎌倉で太平記や吾妻鏡を講師の下で面白く読ませていただいていることを思うと不思議な気がします。青年期は別として会社勤めに入ってからほとんど本を読まなくなりました。顧みると会社の製品や技術やその歴史はもともとと本によってそれらの知識を求めるべきでした。営業や購買や法務や文書部門でも本でももつと勉強すべきだった、仕事に役立つのだと思います。本社の図書室時代に本に囲まれながらマネジメントの真似事やいろいろのことで会社がらみの本も自分の読みたい本も読みませんでした。図書室勤務はおおっぱらに本が読めたはずなのにです。

それでも図書室勤務時代に関心をいだいた森有正の全集や寺田寅彦、漱石、鏡花、志賀直哉などの全集は業務とは関係ありませんでしたが今も読みたい全集の類です。退職後は読みたい本として井上靖や柳田国男の全集が加わりましたが、上記は夫々拾い読み程度です。一方、現在は3箇所の読書会で読書を少しではあります

生は殆ど読書らしい読書をして来なかったと後悔しています。今になって読書の楽しみを些かなりとも経験するにつれてそう思います。医者の不養生という言葉がありますが、読書をしていない図書館人は自分の体への不養生かもしれません。図書館人であることと読書人であることとどちらがにわとりでどちらが卵でしょうか？一般論としてにわとりと卵の設問は面白いと思うのですが、図書館に関わる者にとつてはどうなのかということは、生き方の問題、個と集団の問題、仕事やマネジメントやボランティア精神対趣味や研究の問題、本の自己にとつての役割などが絡み始め、考え出すと難問です。



俳句八吟

山内 明子

上ル下ル西入ル京や花疲

貌貸してくれと壺焼おごらるる

学なくも恋文得意アツパツパー

蝉の殻くださいといふ庭から来て

二人乗る蘆刈舟やたたみ大

馬鈴薯や美男は駄目といふ家訓

おでん屋の客われひとり出で難し

サーカス去る枯野に杭の穴残し

この10年をふりかえって思う

— 社会的共通資本としての図書館、データベースの整備を —

山崎 久道

戦後の日本は、自動車やエレクトロニクスなどの分野ですぐれた製品を次々に開発し、それらを世界の市場に販売して、大いなる経済的成功を収めてきました。かつて英国が、いま中国が「世界の工場」と言われていますが、20世紀後半には、確かに日本がその立場にあったのです。その結果として、自動車や電子機器などの工業製品、つまりモノについては、日本は圧倒的な輸出超過を誇ってきました。しかし、ちょうど食糧についてそうであるように、情報、特に高度で先端的な情報の分野では、大変な「輸入大国」なのです。今や、日本においては、科学技術分野の先端的な情報は、海外のデータベースや電子ジャーナルといった情報資源を通じて購入される「輸入品」なのです。

海外の情報が私たちの生活や生命に関わっている例を一つあげましょう。わが国の医療の水準は、国際的にみても非常に高いものだと言われています。しかし、わが国病院での高度な医療は、米国等の医学・薬学情報データベースの利用なしには、成立しえないのです。製薬会社における新薬の開発についても同じように、米国の医学・薬学のデータベース利用は欠かすことのできないものです。さらに、米国の化学

情報データベースは、日本中の化学、薬品、化粧品などの製造会社で、毎日のように使われています。最近では、特に自然科学分野の学術雑誌は、大半が海外の有力出版社の手によって電子化され、日本の大学その他の研究者は、それをインターネット経由で、有償で利用しています。その利用経費は、わが国大学等の研究経費を強く圧迫しているのです。

それならば、日本でこういう有力データベースを構築すれば良いではないか、と思われるかも知れませんが。しかし、米国の化学情報データベースがスタートしたのは、日本の明治時代です。医学情報データベースMEDLINEには、MeSHという精緻な用語統制システム（シソーラス）が備わっています。このシステムによつて、症状や薬効などから、間違いなく該当情報が検索できるのです。こうしたことは、一朝一夕でできることではなく、専門家が、データベース構築を目指した血の汗の流るような永年の作業の中で、ひとつひとつ知恵を絞って解決してきた結果なのです。日本が、コンピュータの能力や投入資金などの「形」のみを真似してみても、簡単に実現できることではないのです。

そもそも、日本では、「情報を整理してあとで使う」という行為や仕事は、徹底的に冷遇されてきました。データベースというのは、そのための装置ですから、こうした環境下では、熱心に作られないでしょう。たとえば、警察で捜査記録をデータベースに入力していなかったために、疑わしい人物が捜査線上に上つても情報が得られず、重大な結果を招いたこともありました。そもそも、記録を作つてそれを蓄積することなど、本来の仕事に比べて、よけいな瑣事だったのだと思われれます。こうした風土では、データベースに対する目も冷ややかで、予算も付かず、ひとり担当者だけが苦闘するのです。

別の問題もあります。日本では、政府や財団から巨額の研究資金が大学等の研究者に補助金などの形で与えられています。そうした資金をもとに研究者は研究を行い、その成果を論文にまとめます。問題はその後です。こうした研究者が、特に自然科学分野であれば、できるだけ海外の有力学術雑誌に投稿しようとする。なぜでしょうか。それは、こうした雑誌が広く読まれ、引用され、学会への影響力も大きい（インパクト・ファクターが大きい）ので、自分の論文がその雑誌に載つたということが研究者としての経歴に大きなプラスになるからです。事実、大学の教員採用などの時も、こうしたいわば「ブランド誌」への論文掲載は、人事評価の際のプラス要素となるといわれています。従つて、日本国の資金で（もとは税金です！）行われた研究の成果が、外国の雑誌に載り、それが

電子ジャーナル化されて、それをまた、日本人が買っているのです。もちろん、情報を整理するノウハウやデータベースの設計思想においては彼らの方に一日の長がありますから、その方が使い勝手の良いものができるのかも知れませんが。

一方、企業などの組織においても、内部にある情報は、企業の価値を高めるものとして、インタンジブルズなどの名称で見直される機運にあります。米国では、これを会計的に資産として扱うことも検討されています。日本でも、ナレッジマネジメントとか情報共有の推進とか「暗黙知を形式知に」等のかげ声のもとに、これに沿った動きが出てきています。しかし、先に述べたように、「情報を整理することに価値を見いだす」という根本のところでコンセンサスがとれていないために、形だけのものになったり、一過性のブームで終わったりしています。あの、巨人Googleが、「世界中の情報を整理する」と宣言しているのと比べると何という違いでしょう！

日本でも、即刻、情報を整理して蓄積するための国家戦略を策定して、必要に応じて教育の中でそういった思想を普及してゆかなければなりません。これは、単なるコンピュータやインターネットといった情報技術の応用問題ではなく、日本の社会や産業の今後の発展を占う鍵になる根本問題です。ただ、これまで日本では、情報は、主にワザや名人芸といった形で、人や物と一体化してその一部として存在してきました。図書館、文書館、データベースなどの西欧

型の情報ストックの形式は、そうした情報を人間やモノから引きはがして、独立して流通する仕組みとして考えられたのです。今後の日本は、西欧型の情報ストック装置を充実させるとともに、人間やモノに一体化した情報のありよう、つまり「文脈つき情報」を蓄積利用できる仕組みを早急に整備することも求められるでしょう。

この10年間、ネットワークやコンピュータ、携帯電話などのIT機器の整備・普及は、驚くべきスピードで進行してきました。その一方で、情報の社会的共通資本である図書館・文書館・データベースの進展は、決してかばかしくありません。これは、日本における文化の問題です。「Googleとの闘い」文化の多様性を守るために——（ジャン・ノエル・ジャンヌネー著、佐々木勉訳、岩波書店、2007年）を著わしたフランスの図書館人は、自国の情報記録は文化そのものであり、それは、自国で保護し保存するべきとの趣旨のことを言っています。日本人の記録が、米国のサーバーに置かれることは、「便利だから良い」のでしょうか？情報はフローとして利用されればよくて、ストックを保存することなど、無意味なことなのでしょうか。私たちは、そのことをよく考えるべき時に遭遇しているのかもしれない。

「社会的共通資本」という考え方があります。それは、「一つの国ないし特定の地域に住むすべての人々が、ゆたかな経済生活を営み、すぐれた文化を展開し、人間的に魅力ある社会を持続的、安定的に維持することを可能にする

ような社会的装置」（宇沢弘文「社会的共通資本」岩波新書、2000年、ii頁）を指します。そして、社会的共通資本の例として、自然環境（大気、森林、河川、水、土壌など）、社会的インフラストラクチャー（道路、交通機関、上下水道、電力・ガスなど）、制度資本（教育、医療、司法、金融制度など）があげられています。

とすれば、公共図書館は、この社会的共通資本そのものではないでしょうか。それは、人々が「ゆたかな経済生活を営み、すぐれた文化を展開し、人間的に魅力ある社会を持続的、安定的に維持することを可能にするような社会的装置」にほかならないのです。ひとつひとつの公共図書館は、「社会的インフラストラクチャー」であり、図書館（システム）全体は、「制度資本」なのではないでしょうか。図書館だけではありません。文書館やデータベースも、情報に関わる社会的共通資本なのだと思います。図書館サポートフォーラムは、おそらく、こうしたわが国の社会的風潮に一石を投ずる役割も担っていると思います。図書館は、文化の担い手でもあるし、民族のアイデンティティの守護神でもあるのです。図書館や本に携わる人々が、ひとりひとり、そして、ともに手を携えて、日本が、ほんとうにゆたかな国になるためには、情報面の社会的共通資本を代表する図書館の整備が不可欠だ、ということを一一般の人々や社会に対して、主張し続けてゆく必要があるのではないのでしょうか。

図書館サポーターフォーラムとは？

長倉美恵子

「図書館サポーターフォーラムとは？」とは一体何なのであろう。誠に不届きながら、この団体の設立趣旨や設立事情を私は全く知らない。恥ずかしながら、明確に参加の意志を決めて入会を申し込んだ覚えも定かでもない。何となく「会員」になっているらしく、メールや時折の図書館見学会の案内、『ふぉーらむ』という会誌も頂いている。いつも、図書館見学会には無理をして日程を整えて殆ど参加し、会誌はただくと「こんな好い論評・論文をこんな小誌には勿体ない。図書館・情報関連の専門誌に載せればいいのに・・・」と嘆きつつも愛読させていただいている。

よく「名称は態を表す」といわれるが、わが「図書館サポーターフォーラム」は図書館を支援する人々のフォーラム (forum)、つまり集会広場であることは確かである。まさに「フォーラム」の語源にふさわしく、何となく図書館のプロフェッショナルがどこからともなく集まって、時折思い出したように集まって図書館のことを語り合う機会を持つ。何よりも、どこかの自治体に図書館を設置しようとか、特定の図書館の経営の参与しようとかいう「〇〇図書館を〇〇する会」あるいは「〇〇〇〇協議会」な

どという強烈なメッセージの下に結成、運動をしている団体でないことが、実にすばらしい。

公共、専門、学校、館種はなんであれ、図書館の管理運営の専門性が確立し、図書館の存在が一般の人々の間に根付いている成熟した社会であれば、図書館の運動団体はヒステリックに活動する必要はない。だから、「図書館サポーターフォーラム」の設立は、そんな社会のレベルに遅蒔きながら我が国も近づいた証拠ではないかと思っている。

一方、図書館・情報専門の学会や研究会は、図書館・情報領域のプロフェッショナルの養成や研修、サイエンスとしての確立や進歩・発展を目指している。プロフェッショナルの一員として、学会や研究会に参加、参与するのは当然であるが、馬齢を重ねた身では時に「しんどい」と感じることもある。それでも、やはりプロフェッショナルの端くれとして、いつまでも図書館・情報領域の進歩や発展の状況を知っていたいと思う。そんな者にとって「図書館サポーターフォーラム」は実に有り難い存在である。

これまで私は半世紀以上も海外の図書館事情研究に関わってきたが、わが「図書館サポーター

フォーラム」のような団体を見聞したことがない。いわゆるFriends of Libraryとは異なる。

Friends of Libraryは特定の図書館に関わって設置されているからである。どこの図書館と特定せず、わが会は、この世の全ての図書館を意識したFriends of Libraryと考えてよいのかも知れない。そうであるとすれば、実に「図書館サポーターフォーラム」の発想と設立、活動は世界に誇ってもよいユニークなものである。

今回は「図書館サポーターフォーラム」10周年記念特集号とのことである。この特集号のなかで多分、上記に掲げた「図書館サポーターフォーラムとは？」という疑問が明確にされることと思う。それを期待しつつ、「図書館サポーターフォーラム」へのささやかな私のラブコールで、この一文を締めさせていただきます。

この10年間、「図書館サポーターフォーラム」を支えてきてくださった日外アソシエーツをはじめ、運営に関わって来られた多くの諸兄弟、本当に有り難う御座いました。今後とも、どうぞよろしく。



年 表

— 10 年の活動のあゆみ —



図書館サポートフォーラムのあゆみ

一九九五年（平成七年）

図書館界の動き

その他、情報関連分野の動き

一九九六年（平成八年）

七月十五日

発定

末吉哲郎氏を囲む会／末吉氏の新国立劇場常務理事就任を祝う会（アルカディア市ヶ谷）の席上にて、設立案が承認される。

九月十七日

図書館に対する提言の募集「二〇一〇年の図書館ビジョン」十一月末締切

十一月十五日

見学会「国立国会図書館」

一九九七年（平成九年）

一月二十一日

新年会（美図連等と共催）

三月二十八日

見学会「日仏会館図書室」

四月二十五日

山崎久道さんを囲む会

十二月二十二日

石山洋さんを囲む会

1. 司書講習科目の改正（生涯教育審議会社会教育分科会）／一九九三年以来の司書資格取得のための講習科目の単位を二〇単位以上と改正

2. 国立国会図書館が国内で刊行されたCD-ROMや電子ブックの閲覧サービスを開始

1. 十月 データベースの著作権保護策など検討へ（文化庁）

一月二十一日

東京都写真美術館総合開館

八月

朝日新聞社 asahi.com開始

十一月

マイクロソフト windows95日本語版販売開始

四月

Yahoo! Japanサービス開始

六月一日

全国古書店データベース開始

十月一日

紀伊國屋書店bookweb開始

九月

日本書籍出版協会 books.or.jp開始

九月十一日

青空文庫 正式公開

一九九八年(平成十年)

二月二十七日

昭和第一高校図書館見学

七月一〇日

見学会「アメリカン・センター・レファレンス資料室」、総会

総会後、事務局は日外アソシエーツへ

九月十六日

LSJF会誌・Newsletter創刊

十月十三日

見学会「野村総合研究所 情報リソース部ナレッジマネジメント推進室」

一九九九年(平成十一年)

二月十五日

第一回図書館サポートフォーラム賞表彰式

遠藤征広氏／鬼頭富子氏／濱田敏郎氏／藤田幸弘氏

※表彰式同日、日本図書館協会新館見学

四月ごろ

図書館サポートフォーラムホームページOPEN

五月十三日

見学会「早稲田大学総合学術情報センター、演劇博物館」

九月十二日～十三日

見学旅行「渥筆堂文庫」…山形周遊…銘酒「東光」酒造資料館など

十月十八日

「濱田敏郎先生喜寿お祝いの会」

十一月六日

「図書館とともだち・鎌倉」Jointフォーラム(鎌倉市中央図書館見学・交流会)

1. 改正著作権法施行(公衆送信権、送信可能化権などを創設)

2. 十月 日図協、東京都中央区に新築された日本図書館協会会館に移転

3. 四月 「子どもの本の日」設定

1. 図書館法改正を含む「地方分権一括法」公布。二〇〇〇年四月から施行。館長の司書資格の全面削除。NPO、PFI。

「高知こどもの図書館をつくる会」がNPO法人により運営

2. 国立大学の独立行政法人化への流れ

3. 私立大学図書館協会は十月に『図書館自己点検、評価ガイドライン』を刊行

「図書館改善要項に基づき、各図書館が自己点検、評価を実施するときの点検課題、点検方法、分析の手法を解説した」

二月

国内のインターネット人口一、〇〇〇万人を突破

四月

国立情報学研究所 NACSIS webcat開始

七月

マイクロソフトWindows98日本語版販売開始

一月十九日

国立国会図書館 国会会議録検索システム開始

二月

NTTドコモ iモード対応携帯電話サービス開始

五月

「2ちゃんねる」開設

図書館サポートフォーラムのあゆみ

二〇〇〇年（平成十二年）

二月十六日

第二回図書館サポートフォーラム賞表彰式

本間一夫氏／三多摩レファレンス探検隊／安井清子氏

九月五日

見学会「日本点字図書館」

十二月四日

ミレニアム忘年会

ミニ講演会／三輪眞木子氏「電子情報サロンとしての図書館」

二〇〇一年（平成十三年）

二月十五日

第三回図書館サポートフォーラム賞表彰式

深井人詩氏／図書館ともだち・鎌倉／むすびめの会

十月十六日

見学会「印刷博物館」

十一月十八日～十九日

見学旅行「磐越小旅行」：會津八一記念館、鉄道博物館、北方文化博物館、麒麟酒蔵、狐の嫁入り屋敷。磐越西線の鹿瀬「ホテル角神」に宿泊
十二月十九日

図書館界の動き

1. 公共図書館では一九九六年以来資料費の減額
2. 職員問題 公共図書館の館数は前年度より二％増加、それにもかかわらず、専任職員数は一・二％減少
3. IT化への取り組み：七月の九州・沖縄サミットにおいて採択された「グローバルな情報社会に関する沖縄憲章（IT憲章）」をうけてFLAにおいて「シャドウG」が設立された。日本からは松村多美子氏（梶山女子学園大学）が就任した。
4. 電子ジャーナル・電子図書館：四月に関東・東京地区国立大学五校が学術出版社コンソーシアムJIOCC/NUを作った。わが国の電子ジャーナル・コンソーシアム第一号

1. 公共図書館の削減 ことに資料費
2. 著作権問題（図書館複本購入とコピー問題）
3. 七月 「公共図書館の設置及び運営上の望ましい基準」文部科学省告示
4. 十二月 「子供の読書活動の推進に関する法律」公布
5. 委託問題

その他、情報関連分野の動き

五月五日

国立国会図書館 国際子ども図書館児童書総合目録開始

八月

検索サービス「Google 日本語版」開始

十一月一日

amazon.com 日本語版開始

三月

iモード契約者二・〇〇〇万件を突破

七月

小泉内閣メールマガジン創刊十二月
「子どもの読書活動推進法」制定

二〇〇一年「元気がいっぱい」忘年会

二〇〇二年(平成十四年)

二月十四日

第四回図書館サポートフォーラム賞表彰式

(財)松竹太谷図書館／立川とヲオスを絵本で結ぶ会／渡辺順子氏

六月九日

見学会「東京都写真美術館／恵比寿麦酒記念館」、総会

二〇〇三年(平成十五年)

一月十七日

見学会「国際子ども図書館」

三月十一日

第五回図書館サポートフォーラム賞表彰式

新田満夫氏／波多野宏之氏／松下鈞氏

※特別講演会「出版と図書館」講師：清田義昭氏

図書館サポートフォーラム賞授賞式と同時開催

八月二十七日

見学会「国立劇場 伝統芸能情報館」

十一月二十日

フォーラム・セミナー「自分史をつくろう」
「楽しい自分史の考え方―二十一世紀の自分史は
こうつくる―」講師：近江哲史

1. 五月 「国際子ども図書館」全面開館

2. 十月 国立国会図書館関西館の開館

3. 「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」の策定とそれに関わる動き

4. 図書館情報大学、筑波大学に「図書館情報専門学群」として合併

5. 「ベストセラー大量貸出」批判をめぐる議論と図書館界からの反論

6. 船橋市西図書館の蔵書廃棄問題をめぐる動きについて

7. 国会図書館と関西館の組織編成

1. 四月 十二学級以上の小・中学校に司書教諭の設置が義務付けられた

2. 九月 指定管理者制度の導入(地方自治法一部改正)

3. 知的財産基本法施行

4. 個人情報関連法成立

四月十日

国立情報学研究所 N-1引用文献情報ナビゲータ開始

十月一日

国立国会図書館 NDL-OPAC開始

十月八日

国立情報学研究所 webcat plus 開始

四月一日

国立国会図書館 児童書デジタルライブラリー開始

図書館サポートフォーラムのあゆみ

二〇〇四年（平成十六年）

三月十八日

第六回図書館サポートフォーラム賞表彰式

金沢工業大学ライブラリーセンター（笹一寛 館長）／多摩地域の図書館をむすび育てる会（代表

・黒子恒夫氏）／村橋勝子と「社史の研究」

六月二十五日

見学会「アド・ミュージアム東京（ADMT）」

十一月三日

文集「ふぉーらむ」第一号創刊

十二月ごろ

図書館サポートフォーラムホームページ、リニューアル

二〇〇五年（平成十七年）

四月十五日

第七回図書館サポートフォーラム賞表彰式

菊池佑氏／京藤松子氏／小林是綱氏

七月一日

品川見学会「味の素食の文化ライブラリー」『物流博物館』

六月十五日

文集「ふぉーらむ」第二号刊行

十一月五日

見学会「山中湖情報創造館」

十二月十二日

見学会「国立国会図書館」

図書館界の動き

1. 日本の図書館員養成の課題

2. 図書館利用者に障害を持つ人々へのサービス
障害者用音訳資料作成の一括許諾システムスタート

3. 図書館の安全確保と災害への対策
十月の新潟中越地震をはじめ、図書館においても自然災害の多い年

「危険対策マニュアル」を日図協独自編集

4. 改正著作権法施行（書籍・雑誌の貸与を貸与権の対象としない経過措置の廃止）

5. 国公立大学の法人化、多数の再編・統合が行われる

1. 国立国会図書館における「活動評価」制度の導入（二〇〇四年度サービス規準評価）―活動評価の活用と課題

2. 「文字・活字文化振興法」の成立（二〇〇七年・七・二十二 第一六二回通常国会）

法案は超党派の国会議員二八六人による「活字文化議員連盟 事務局長・肥田美代子」

すべての国民が、その自主性を尊重されつつ、等しく豊かな活字・文字文化の恵沢を享受できる環境の整備

3. ISBN（国際標準図書番号）初の規格改定（新コード大系は十三桁）

4. 図書館における医療情報サービスの展開―健康・医療情報が求められる社会背景

その他、情報関連分野の動き

二月

国内のインターネット人口六、二八四万人

三月一日

美術図書館横断検索ALIC公開

三月

国立美術館 所蔵作品総合目録検索システム公開

四月一日

国立情報学研究所 NII学術コンテンツ・ポータル開始

四月

国立公文書館 デジタルアーカイブ開始

個人情報保護法施行

十月

apple ipod、itunesG 発表

十一月

amazon.co.jp 「なか見！検索」開始

十二月十五日

国立国会図書館 レファレンス協同データベース

二〇〇六年（平成十八年）

二月二十四日

見学会「浦安市立中央図書館」

四月二十日

第八回図書館サポーターフォーラム賞表彰式

松岡享子氏／近江哲史氏／高橋晴子氏

十月十三日

IFLA東京大会二〇周年記念懇話会

二〇〇七年（平成十九年）

二月二日

「渋沢史料館」見学会

四月十三日

第九回図書館サポーターフォーラム賞表彰式

平井紀子氏／水谷長志氏／松岡資明氏

七月五日

「千代田区立千代田図書館」見学会

九月二十日

図書館雑誌十月号特集「図書館の応援団」に図書館サポーターフォーラム執筆記事掲載

九月二十七日

「花王ミュージアム」見学会

十月二十七日

セミナー「ボンピドーセンター公共情報図書館（BIP）のもたらしたものの二十年の奇跡と日本」日仏図書館情報学会、アート・ドキュメンテーション学会と共催

「花王ミュージアム」見学会

（患者図書館の動き、医学図書館の動き、公共図書館の動き）

開始

1. 教育基本法の改正（一九四八年制定以来）法律一一〇号

2. 文字・活字文化推進機構設立準備会の発足

3. 自治体合併―設置母体の変容―平成の大合併

4. 管理運営形態をめぐって―指定管理者制度

5. IFLAソウル大会

1. 国立国会図書館デジタルアーカイブ事業展開

①「近代デジタルライブラリー」明治期図書に加え、大正期の図書十五・七〇冊追加公開

②電子情報の長期的保存に向けて：パッケージ系電子出版物CD・DVD、フロッピーのPC再生化の試み

③デジタルアーカイブポータル提供

2. 北海道市立タ張図書館、図書コーナーへ（財政破綻の状況下において、図書館機能を残すために健保福祉センター内に「図書コーナー」開設。市民ボランティアの力を借りての再生

3. 子どもの読む、調べる習慣づくりに向けて―「子どもの読書サポーターズ会議」

（文部科学省初等中等教育局児童生徒課の取り組み）

4. 知的障害者の読書を支援する活動―わかりやすい本の刊行と普及のための研究会の発足（絵記号を使ったわかりやすい本の刊行など）

一月十九日

内閣府―IT戦略本部―IT新改革戦略及び重点戦略

一月
JRR東日本モバイルs.c.o.e開始

四月一日

地上デジタル放送の一部「ワンセグ」開始

十月二十四日

文字・活字文化推進振興設立記念総会

— 後 記 —

「ふぉーらむ」第5号（図書館サポートフォーラム10周年記念特集号）をお届けします。

特集号として、会の「10年の活動のあゆみ」を中心に、図書館界等の動きを加えた年表形式にしてその足跡をまとめました。会員の文集も「10年をふりかえって」を主テーマに、各位の思いやエッセイをお願いしました。

第1号が発行されたのが2004年11月、28ページという小冊子の「文集」として誕生した本誌も号を重ねるごとに充実、こうして第5号特集号を迎えることができたのも幹事の努力もさることながら、事務局を担当している日外アソシエーツの多大なバックアップがあったからこそです。

学会とは異なり、難しい〈しばり〉のないこのクラブは、図書館OBのフランクな交流の場として輪を広げてきましたが、最近では現役バリバリの会員も迎え、新たな方向性も見られます。

20周年特集号では、提言の場として、また図書館界に一石を投じる存在感のある「フォーラム」に成長することを期待します。

（平井紀子）

ふぉーらむ 第5号

2008年7月25日発行

発行人 末吉哲郎

制 作 平井紀子／森本浩介／星俊雄

発行所 図書館サポートフォーラム

〒143-8550 東京都大田区大森北1-23-8

日外アソシエーツ（株）内

TEL.03-3763-5241 FAX.03-3764-0845

http://www.nichigai.co.jp/lib_support/index.html
